



2015 No.34



# 栽培現場への研究情報の伝道士不足

# 久保田 芳 久

(㈱坂田種苗(現㈱サカタのタネ)に入社し、40年栽培現場を見てきた中、様々な出会いと経験をさせて頂きました。

その中で、農家が営む農業技術(農業習慣)と研究部門の発見などとのかい離がかなりあり、その距離は埋まらず、さらに開いたように思います。足りないのは、教祖ではなく伝道者の数です。

今年の花葉会セミナーでのシクラメン農家見学会で、 葉柄を潰しての養分分析法が紹介されました。研究確立が遅れたのでなく、この手法が農村に未だに入っていない事に問題があります。そして当日参加の普及員によると普及所にある高温対策は、気温を下げる事しかないのです。

自分はトルコギキョウで35年産地づくりをしてきましたが、高温時や低日照期の化学肥料は害になり、アミノ酸系肥料が救いとなりました。20世紀中の研究で空中窒素固定細菌のアミノ酸分泌が明らかにされたにもかかわらず、農村部では県の普及部門も含め、19世紀のアンモニアと硝酸態チッソのチッソ成分2点のみの思考領域を出ません。

学生時代の霧ケ峰の監視員、尾瀬での自然解説員などの経験から、あれらの植物は微生物と共生して養分を得ている事を肌で感じました。トルコギキョウもこの典型で、日本のトップグロアーはここを実践しています。21世紀のこの時点でもまだこの情報を受け入れられない産地(県)は、残念ながら栽培面積が縮小しています。

花の世界は野菜の世界と異なる分野(山野草)があり、また原産地からの歴史が浅い植物も花卉園芸に使われています。

トルコギキョウなど歴史が浅い植物は、種内競合も含め、アレロパシーを意識する必要があります。しかし、この研究は園芸学会ではなく、生物学のアレロパシー学会に属します。トルコギキョウでの、この発見と対策を理解した農村部はまだ半分に満たないでしょう。この伝道は自分の仕事と思いますが、自分の非力にも要因があるでしょうが、まだ理解を十分に得られていないのが実情です。

微生物利用となると、栽培技術部門からは歓迎よりも反発があります。しかし土壌病害処理で、バチルス菌、乳酸菌、放線菌の優良株があり、この3種の菌の連続処理で病害防除ができるまでになってきました。生物を使うので、その環境整備、使用技術、ご機嫌取りは必要ですが、「どうすれば働いてくれるか」は確立されています。この伝道は力が要り楽ではなく、伝道者の数が必要ですが、現状は少人数に限られています。

他にも伝道の足りない項目は多数ありますが、農村 部からの距離は縮まりません。

ここで若者への提言、あなたが伝道者になる事もまたあなたが必要とされる道です。

	私の提案 栽培現場への研究情報の伝道士不足	九 保日	田芳久	(1)				
花 葉	商業的花卉育種を概観する;実情、問題点、将来展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	羽毛田智明		` ′				
AL A		**		` ′				
	東アジア(ASEAN諸国)における品種保護制度の最新状況	石川	君子	(7)				
2015 NO.34	カリフォルニア・スプリングフラワートライアルツアーを企画して	金澤	美浩	(10)				
	高知で蘭作りゆうよ	森尾ナ	大次郎	(14)				
	林脩己先生のこと②	小泉	力	(18)				
	浅山英一先生が見出したストック品種の遺伝子を活用した黒川さん父子の育種の大きな成果・・・	林	角郎	(23)				
	表紙解説 ロサ・ペルシカ	長岡	求	(27)				
日次	自叙伝抜粋 庭の花材あれこれ	花岡	喜重	(28)				
	花葉会海外園芸事情調査報告 「平成27年度花葉会海外ツアー カザフスタン」に参加して・・・	高野	恵子	(32)				
	追悼 小田善一郎さんを追悼して	村井	千里	(38)				
	第30回花葉会セミナーレポート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	上原	恵美	(40)				
	花卉園芸学研究室レポート(松戸キャンパス) 松戸花卉研で過ごした日々とこれから…	徳本	翔子	(45)				
	花卉園芸学研究室レポート(柏の葉キャンパス) 多様な価値観の交わる中で…	渡辺	史	(46)				
	園芸別科花組レポート 花と向き合う2年間	大下	翔平	(47)				
	花葉会の法人化について その目的と経過報告	田中	桃三	(58)				
禁無断転載	花葉会総会 (48) 渡辺重吉郎先生の長寿を祝う会 (51) 会員名簿の追加と訂正 (52)							
	花葉会会員近況報告 (53) 一般社団法人 花葉会定款 要綱・幹部会員名簿	(59)						

# 商業的花卉育種を概観する;実情、問題点、将来展望

# タキイ種苗株式会社

羽毛田智明

種苗会社が品種の開発途中の状況を公開することは 基本的にないので、育種状況は各社のカタログなどに 掲載される品種を見て初めて把握できる。毎年国内で 行われる各種展示会や米国・欧州等で行われるパック トライアル、フィールドトライアルなどを訪れると、 発表前の試作段階の品種も展示されるので、最新の育 種の方向性等を実感することができる。

近年の世界的な育種の流れとして栄養系品目の急激な台頭が上げられ、栄養系品目を専門とする育種会社の増加、これに伴う販売形態の変化が見られる。栄養系の育種会社を含め各社の展示会等の事情については、対馬氏の報告(本誌No.31-33号)等を参照して頂きたい。ここでは世界の主要な種苗会社が育種の対象としている品目のうち種子系品目の開発事情について述べる。

# 1. 国内外の草花審査会

国内外で毎年行われる各種審査会の実施状況や入賞 品種の内容を眺めると、種苗会社による育種の大まか な実態が読み取れる。ここでは、全日本花卉種苗審査 会(一般社団法人日本種苗協会主催)と全米審査会 (AAS:オールアメリカセレクションズ)の過去の実施 状況から、草花育種の変遷について概観してみた。

# ■全日本花卉種苗審査会審査品目の移り変り

全日本花卉種苗審査会は今年で 61 回目を重ねるが、これは草花類を対象とした歴史ある国内審査会である。毎年、日本種苗協会が審査対象品目を選定し、これに応募した種苗各社の品種が得点を競う。同様の審査会は野菜でも行われている。毎年、上位入賞を果たした品種のうち、特に優れたものについては農林水産大臣賞や食糧産業局長賞が授与される。審査会自体の詳細は平山氏の記事(本誌No.32参照)に詳しい。

表は、この審査会で審査が行われた品目を10年おきにピックアップしたものである。審査品目は各種苗会社の審査希望品目のアンケート結果をもとに選定されるので、自ずと種苗会社で育種が盛んな品目が選定されることになり、審査品目はその時代における重要度および各社の育種に対する力の入れ具合を反映する。

私がこの業界に入った1970年代からの移り変りを見る。1975年(昭和50年)の第21回のパンジーの部では、F1品種と同時に固定品種も出品されており、固定種が農林水産大臣賞を獲得している。サカタのタネのF1マジェスティックジャイアントは1966年(昭和41年)にAASに入賞した歴史的なシリーズで、1975年、パンジーは既にF1時代に入っていたが、F1万能ではなく固定種

1975年(昭和50年)第21回		1985年(昭和60年)第31回		1995年(平成7年)第41回		2005年(平成17年)第51回		2015年(平成27年)第61回	
品目	タイプ・作型等	品目	タイプ・作型等	品目	タイプ・作型等	品目	タイプ・作型等	品目	タイプ・作型等
ストック		シネラリア		シネラリア		花壇苗	初夏	スターチス	シニュアータ
キンセンカ		ダイアンサス		プリムラ・ポリアンサ		ユーストマ	季咲き	パンジー・ビオラ	冬花壇
ハナナ		ジニア		スターチス	シニュアータ・高冷地育苗	ユーストマ	シェード	ユーストマ	3月出し
デージー		ケイトウ	久留米系	スカシユリ	アジアティック系	パンジー	ビオラ含むポット苗	ペチュニア	春出しポット栽培
アスター		ケイトウ	八千代系·羽毛系	ユーストマ		花壇苗	秋	ユーストマ	季咲き
ケイトウ	久留米系	ハボタン	固定種	アスター				アスター	季咲き・露地
ケイトウ	八千代系·羽毛系	ハボタン	交配種	サルビア				キンギョソウ	秋出し
ジニア		パンジー		ケイトウ	久留米系			パンジー・ビオラ	秋出しポット栽培
サルビア		ジニア		ケイトウ	八千代系·羽毛系			ユーストマ	10月出し
				ヒマワリ					冬出しポット
				パンジー	3号ポリポット			パンジー・ビオラ	冬花壇
				ストック	極早生・一本立ち				
				ハボタン	通常栽培				
				ハボタン	矮化剤処理				
				シクラメン					
				パンジー	長期観察				

表:全日本花卉種苗審査会の審査品目の移り変り

もまだ通用する時代だったということであろう。それから10年後の1985年(昭和60年)の第31回審査会では、ハボタンにおいてF1と固定種の2部門で審査がされている。ハボタンもF1たかシリーズやF1さぎシリーズが1972年にタキイ種苗により発表され、急速にF1化が進んだ時代であったが、当時は固定種も根強く使われていた状況がわかる。

同年、ケイトウは久留米系と八千代・羽毛系の2部門で審査が行われた。これは当時の夏場におけるケイトウの重要度を反映したもので、その10年後の1995年(平成7年)第41回の審査会になってもケイトウはこの2枠で実施されている。しかし、その後ケイトウは2000年の審査会以降、品目自体が姿を消すことになった。この時代、夏の切花や花壇用としての重要度が他の品目の登場により低下したことを反映している。

1980年代から急激に重要度を増した品目がユースト マである。当時は、ユーストマではなく、リシアンサ スという呼称がより一般的であった。成長品目のユー ストマは2005年(平成17年)第51回審査では、季咲き とシェード栽培という2枠で審査されることになる。 その後もユーストマの切花としての重要度は増々高ま り、近年はついに3作型で開催されるに至り、出品点 数も非常に多い。これは、ユーストマという品目が切 花としての優れた特性を持っているとともに、花色や 花型、生態等の変異幅が広い新参品目であるため、今 なお育種の可能性が大きいことを示している。ユース トマと並んでこの20年ほどで急速に伸びた品目にヒマ ワリがある。ヒマワリはかつて継続して毎年審査が行 われていた品目であったが、2000年(平成12年)から 審査会は実施されなくなっている。ユーストマは微細 種子である点で扱いが面倒ではあるものの、小面積で も採種しやすいことが個人育種も成り立ちやすい理由 になっている。これに対してヒマワリは採種に何へク タールも面積が必要となることがあるため、品種を安 定的に成立させ続けるのは容易ではない。商業的育種 においては採種が伴わない品種は実用品種とは言えない。

1990年頃には毎年審査が行われていた新テッポウユ リは特異的な実生系ユリでかつては重要度も高かった が、育種における花色や花型の自由度が狭いため品種 の展開が乏しく、1994年(平成6年)を最後に開催さ れなくなった。その後、時代を反映し豪華な球根系ユ リの審査会が開催された年もあったが、ユリ自体の人 気低下とともにこれも審査はなくなった。

サルビアもかつて審査会の定番品目であったが、取り止めになった品目である。主力のスプレンデンス種

等の一年草タイプは育種が煮詰まりマーケットが拡大 しないことを示している。しかし、サルビアは栄養系 の領域に進出し、近年これらのグループは元気な品目 として復活している。

2005年(平成17年)には、花壇苗品目の多様化という時代背景のもと、幅広い品目を対象に「初夏の花壇苗」と「夏の花壇苗」という新規の2部門が設定された。これは、種類にとらわれずどんな品目でも出品できる従来なかった審査方式であった。しかし、これが成り立つためには、花壇苗に対して見識の高い審査員が揃うことが必要である等の理由から、国内では成立に限界があったと思われ、残念ではあるが現在は実施されなくなった。花壇苗分野の専門家の層の厚さは今だ欧米に劣るように思われる。

近年は、ペチュニアは種子系、栄養系を問わずひと つの枠にまとめられ審査されている。一時ほど勢いの ないペチュニアという品目の現状を映していると考え られる。

# ■全米審査会入賞品目の移り変り

(AASのHP http://all-americaselections.org/参照) 1932年(昭和7年)に設立された全米審査会(AAS)は世界で最も歴史と権威のある草花及び野菜類のコンクールである。同様のコンクールとして、欧州には全欧州審査会(FS:フロロセレクト)がある。これらの審査会に入賞するためには、30か所にも及ぶ異なる気候環境でも特性を発揮する品種の適応性の高さと、同時に新規性が認められることが必要である。数少ないAAS ゴールドメダルを獲得した千葉大の大先輩、故橋本昌幸氏のキバナコスモスのサンセットはあまりにも有名であるが、このクラスの歴史的品種が草花の長い改良史には他にも多数登場する。AASの受賞品種を見ていくと、様々な品目と品種の興亡の歴史をありありと感じ取ることができる。

黎明期の1930年代にはアスターやキンセンカ、キンレンカの受賞が多く、又、スイートピーやラークスパー、バーベナなどさまざまな固定種も受賞している。この時代、既にマリーゴールドとペチュニアは非常に重要な育種対象品目になっていた。この10年間でマリーゴールドは16品種、ペチュニアに至っては20品種が入賞している。黄色系の花色のすばらしいマリーゴールド、これ以外の花色をすべて持つペチュニアがもてはやされ、これに応えるように次々と新規性の高い品種が開発されていった状況が推し量れる。著名なサカタのタネのビクトリアス系オールダブルペチュニアもこ

の時代の立役者のひとつである。いまだに広く栽培されるコスモスのセンセーション、アサガオのスカーレットオハラもこの時代の受賞品種である。

1940年代になってもマリーゴールドとペチュニアの 品種開発は非常に盛んで、それを反映し、それぞれ17 品種、12品種も入賞している。Burpee社、Bodger社、 Waller-Franklin社 の育成が際立って多く、この時代 にこの三社が草花育種に果たした貢献度の大きさがわ かる。しかし、今これら3社は存在しないか往時の姿 はもうない・・・。

1950年になるとBodger社がペチュニアのファイアーチーフで金賞を獲得している。この品種を見たことはないが、さぞやインパクトを与えた赤いペチュニアであったことだろう。今年、タキイ種苗は赤いペチュニアのトリロジーレッドを入賞させたが、同じカテゴリーのこの2品種を並べて栽培すれば、65年間≒65世代の育種の時間を感じることができるだろう。この年代は、マリーゴールドでDenholm社、ペチュニアではPan American社が多くの品種を入賞させている。Pan American社はキンギョソウでもロケットシリーズ6色を同時入賞させた。1品目で6品種を同時入賞させたのはロケットだけである。種類的には新しい品目が入賞することはなく、比較的種類の乏しい時期であったと言えるかもしれない。

1960年代は戦争を乗り越え日本の育種が復活した時代である。サカタのタネは前述のパンジー、F1マジェスティックジャイアントを含め8品種を入賞させている。キバナコスモスのサンセットは第一園芸から出品され1966年(昭和41年)に受賞した。画期的な世界初のゼラニウムの実用品種ケアフリーシリーズは1968年(昭和43年)に3品種が受賞した。ゴールドスミス社の創業者である新進気鋭のブリーダー、グレン・ゴールドスミスが登場したのもこの時期だ。ダイアンサスやキンギョソウで既に成果を出している。ジニアでBurpee社、Bodger社による育種が旺盛に行われたのもこの時期である。この2社中心に合計11品種が入賞している。

1970年代は、千葉大の大先輩である、元サカタのタネの武田和男氏、高木誠氏、元タキイ種苗の伊藤秋夫氏が目覚ましい育種の成果を生み始めた時期だ。サカタのタネがアメリカフョウのサザンベルやホリホックのサマーカーニバル、ペチュニアのブラッシングメイドなど6品種、タキイ種苗がパンジーのインペリアルブルー、ジニアのレッドサン、ダイアンサスのスノーファイアーなど5品種を入賞させた。当時、ドイツの

老舗ベナリー社に入賞がないのとは対照的である。

この時代に登場した矮性ジニアのピーターパンシリー ズは7品種が入賞し、しかもうち2品種はゴールドメ ダル獲得の特筆すべきシリーズだ。これらジニアの育 成には米国に渡った日本人ブリーダー有光芳郎氏が関 わった品種も多い。ダリアのレッドスキンはWaller社 育成で今なお販売される息の長い黒葉品種、1975年の 受賞だから40年が経つ。もっとも、サカタの矮性キン ギョソウ・フローラルカーペットは1965年(昭和40年) の受賞で、現在も販売されているので、これを上回る 長寿品種だ。ちなみに、野菜ではタキイ種苗のキャベ ツ0.S.クロス (一号カンラン) が1951年 (昭和26年) の受賞品種で、61年目の現在も健在である。この品種 はアブラナ科の不和合性育種体系を確立した千葉大の 大々先輩である故治田辰夫氏の育成品種だ。治田大々 先輩は1993年(平成5年)に亡くなられたが品種はい まだに生きている。時代を越えたこんな品種は、なか なかできるものではない。治田大々先輩、恐るべしである。

1980年代は彗星の如く現れたインパチエンスが急成長した時代である。この時代を築いたスーパーエルフィンシリーズは、AAS の歴史には登場しない。育種の歴史を作った偉大な品種でありながら AAS受賞に浴さない画期的な品種は他にもある。タキイ種苗から1982年(昭和57年)に発表された伊藤秋夫氏育成の切花用ストック・ホワイトワンダーもその一つだ。種子形質に着目し百年も続くストックの八重咲きの課題をクリアし、関係者をあっと言わせた。

1990年代にはこれまでにない新しい品目が多く登場 し時代を飾ったが、Benarv社がドイツ人の育種魂を見 せた特記すべき品種が、1991年(平成3年)のパンジー の濃いオレンジ色品種パハラジャだ。この品種の血は ビオラも含め現在に至るさまざまなオレンジ色品種に 受け継がれることになった。1995年(平成7年)には 世界を震撼させた匍匐性ペチュニアのパープルウェー ブが入賞した。ご存知の通り、この品種は当時キリン で花の育種に取り組んだ千葉大後輩の竹下大学氏の育 成である。安藤敏夫教授の南米遺伝資源収集の成果を 具現化した、物語ある品種だ。この時代には、もうひ とつ歴史的な品種が登場した。それは、サカタのタネ が育成した種間雑種ジニアの実用品種プロフュージョ ンシリーズである。このシリーズはチェリーとオレン ジが1999年(平成11年)に、2年後にホワイトもゴー ルドメダルを獲得した。ジニア育種の大きな課題であっ たウドンコ病を克服したこの品種は、草花類の耐病性 育種の歴史に刻まれる品種になった。

2000年頃になると、時代が求めるままに多様な新品目で受賞が見られるのが特徴だ。エキナセアやガイラルディア、ルドベキア、ディアスシア、アガスタシェなどである。いずれも従来、宿根系で扱いにくかった品目を種子系にしたところに価値がある。

2010年代以降今日に至る間では、手前味噌で申し訳ないが、次の2品種を上げさせて頂く。ひとつは2011年(平成23年)受賞のハボタンのグロッシーレッドである。ハボタンを得意とするタキイ種苗による世界初のAAS入賞ハボタンである。葉にブルームのない照り葉が最大の特長であり花壇用ハボタンの新分野を創出した。もうひとつは2014年(平成26年)入賞のペチュニア・アフリカンサンセット(日本名:オレンジクィーン)だ。世界のブリーダーの求め続けたオレンジ色F1品種が実現し、花色育種の一里塚となった。実は、この品種も『南米の恩恵』に浴している。

2013年(平成25年)審査からNational と Regional のふたつのカテゴリーに入賞枠が分けられたことは AAS 史上の大きな変革である。Regionalは全米を6地域に分け、そのいずれかの地域で評価が出れば Regional部門の入賞品種となる。これは気候の異なる地域ごとに適応性の高い優秀な品種を選定し、栽培者が利用しやすくしようという狙いに基づいた試みである。

#### 2. 育種の現場で思うこと

以上に述べたことが国内外の審査会における品目や 品種の概観であるが、次に、育種の現場にいて日頃商 業的育種について思うことを書いてみる。

育種をやる人は皆画期的と言われる品種を作りたいものだと思うが、その思いとは別に、商業的育種では品種が世に出せるか出せないかが問題であり、営利目的であるから、出した品種が売れるかどうかの評価が優先される。これは当然である。商業的な育種は、育種の研究や技術の可能性の話とは別次元で進行している。この言い方は誤解をまねくと思われるが、新技術等による画期的といえる品種はそうは出ないことになっている。だからこそ画期的というわけだが、通常の商業的育種においては、画期的でなくとも普通に優秀な品種を継続的に確実に育成できる能力の方が重要である。

生産者や消費者の要望を次々に叶えるような、夢のある品種を作りたいものだ! ともブリーダーは考えてはいる。しかし、なかなか達成できない目の前の目標値に向かって四苦八苦しているのが大方のブリーダーの現実である。夢を語ることは大切だが、むしろ、確実に業務としてこなし続けられるある種のタフさが商

業的育種のブリーダーには必要であると言える。

それでは、一生懸命売れる品種を目指して取り組め ば品種ができるかと言うと、これがうまくいかない。 私の知る限り、『花のブリーダー』と言える人で、売 れる品種を育種するのが目的だとばかりにシャカリキ になっている人はいない。たいがい、『もっと鮮明で 濃い赤色の品種を作らなければ』とか、『5日早咲き にすれば価値が出る』とか言うだけだ。ブリーダーは 現場の育種の実践者であり、植物あるいは育種そのも のに興味を示すそのような話しぶりにしかならないの だと思われる。故橋本昌幸氏と一度だけ育種の話をさ せていただいたことがある。育種にはだいぶ頭を悩ま せられたようではあるが、シャカリキに育種をされた 様子は感じられなかった。前述の伊藤秋夫氏も生臭さ の全くない方である。思いのままにその品種を作りた いから作るだけで、儲けのためにやっているようには 見えなかった。一生懸命取り組まれていたが、切迫感 は感じられなかった。

私も花卉産業の発展を願うひとりではあるものの、 産業、産業と叫んで儲けのために品種を作ろうと頑張 り過ぎるのも、何か『花の育種』のコンセプト自体に そぐわないような気がする。花が潤いを与えるもので あるなら、潤いを与える品種作りの現場もあまり銭々と は言いたくない、それが過酷な商業育種の前線であっても。

### 3. 花卉のデザイン育種

花の育種がものを見る視点において芸術分野とオー バーラップするのは事実である。

以下、私が花の育種に期待したいことを書いてみた。 以下の文章は、『JATAFFジャーナルVol.2 No.12, 2014 年』の掲載文に多少手を入れたものである。ここで言 うデザイン育種とは DNAマーカー育種等の最近の育種 手法のことではない。建築や装飾のデザインと同じ意 味合いである。

花卉には野菜や果樹と異なる特徴が潜在する。それは、花卉が農業生産の対象となる作物であると同時に美的な観賞の対象として扱われるということであるが、観賞を目的とする花卉には、食の対象として発展した野菜や果樹とは異なる発展の経緯がある。今日に至るまで、幅広い植物の種類と品種が花卉として観賞の対象となり、多様な色や形等が人々の心を引き付け、心地よさを満たしてきた。その心地よさを、観賞植物の品種作出という形で追求する行為が花卉育種と言える。

花は嗜好品とされ流行に伴い品種の寿命が短いのが 当り前と思われがちだが、実際には長く人気を保つ品 種とそうでない品種がある。そこには栽培性等の生理 生態的な品種特性の優劣が大きく影響している場合が あるが、栽培性が不十分であっても長く使われている 品種もある。花の品種はそもそも多様であることが当 り前であり、時代はまさに多様化の時代に向かってい る。しかし、そのような状況にあってもできるだけ長 く使われる品種を育成するのが商業的育種の目指すと ころとなるべきである。商業的な育種においては、そ うでなければ効率が悪く事業として成り立たない。時 代を越えて好まれる品種を育種していこうとする姿勢 が大切だ。流行に反応して品種を作り出すのでは既に 遅い。育種には10年程かかるので流行となる10年前に 育種のスタートを切っていないと流行は作れないこと になる。とは言え、常に流行の10年先を予測して育種 をスタートさせることは至難の業である。これは流行 に惑わされない育種が大事ということでもある。

花卉育種の対象となる特性としては、栽培性、耐病性、早晩性や日持ち性などが重要であるが、これらと並び観賞性が重要である。『観賞性が優れている』という場合その意味を考えてみると、切花品目であれば、切花を構成するパーツである花と葉、茎等の色の構成、質感、形のバランスが優れていることである。色彩美と形態美によるデザイン性が優れているということである。万人が好むデザイン性を具えた品種はあり得ないが、より多くの人が好む『最大公約数的品種』の育成が必要になる。

そのためには、例えばある花を美しいと思うとすると、人は一般にその花の何を、どこを認識して美しいと感じたのか、それを分析することにより長く利用される品種としての必要要素が見えてくるのではないか。花にも美的要素の分析の上に成り立つ好ましい形と色があるはずである。花卉育種は遺伝育種の理論を基礎とするが、同時にアートあるいはデザイン的な側面を持っていることをもっと踏まえる必要があるのではないか。視覚に訴える製品の開発という括りで花卉を考えると、花卉育種はデザインの一分野ととらえることができる。ありとあらゆる製品は全て色と形を持ち、デザイナーが新製品を生み出すべくアイデアを練っていくように、ある花の花弁がどのような弧を描き、先端がどのような鋭角を持つのが好ましいかをデザインとして検討していくのである。

花の色と形あるいは香りに関する研究が近年進んでいるが、人文科学的アプローチはあまり行われていないのではないだろうか。花卉研究の目指すところとして、デザインや美術分野との連携による基礎データの

収集と分析はもっと試みる価値があるのではないか。 野菜では、体に良いとされる機能性成分の分析に基づく成分育種が盛んである。一方、花では心に潤いをもたらす『成分』の分析(=美の成分育種や心地よさの成分育種)はあまり進んでいない。観賞植物の育種の対象となる色彩や形態、質感は、計量、評価しにくい部分が多いことから普遍化が難しいと思われるが、ここを解明していくことが必要ではないだろうか。日本には形態にこだわる独自の育種の伝統があり、日本人の美的感性は育種にむいていると思われる。日本人が美の成分育種を手掛ければ、世界に誇る成果が得られるのではないだろうか。

色と形に敏感なデザイン系出身の技術者が参画することによる花卉育種の新展開も期待したい。農学系出身者は、植物好きではあってもデザイナーとかクリエーターと呼ばれるような人とはかけ離れた存在である場合が多い。扱う素材が生き物である点が他分野との決定的な違いであるとはいうものの、同じ色と形を扱うデザイン分野出身のセンスが花卉育種に参画すれば、花卉育種に新たな展開が見いだせるのではないだろうか。未だ、花卉の品種開発にデザインや美術系などの人材が加わったということは聞かない。

海外でも戦える品種の開発のためには、背景に特徴 ある研究の裏付けがいる。我が国が国際競争力を維持 し続けるために、官産学の一層の連携による技術開発 の強化が必要であると思う。これから育種を始めよう という人にとっても、色や形に対する基本的な知識を 学び実際の育種業務に当たることが必要だ。観察と経 験、個人の感性に頼る育種を超えることができないも のだろうか。花卉育種に対するデザイン的なセンスが 不十分であっても、学ぶことにより品種開発のスキル をアップできるプログラムのようなものが欲しい。将 来的には『花卉デザイナー』(花卉装飾の専門家のこ とではない)と『DNAデザイナー』(遺伝子を扱う技 術者)、及び『育種職人』 (フィールド育種の実践者) の連携によりブリーディングがなされるようになり、 中途半端な今日的『ブリーダー』は不要になるのかも しれない。

育種に終りはないが、育種競争が不毛ないたちごっことならないためには独創性が必要だ。古来、日本人は植物との付き合いが得意であると言われる。植物に目が利くから自然に付き合いがうまくなるのだろう。 『改良的創造』に秀でた国民性を活かし、日本が世界に冠たる花卉育種の大国と呼ばれるようになることを願いたい。

# 東アジア (ASEAN諸国) における品種保護制度の最新状況

### 公益社団法人農林水産·食品産業技術振興協会(JATAFF)

石川君子

# 1. 東アジアにおけるUPOV加盟国

ASEAN(東南アジア諸国連合)は、1967年に設立され、現在の加盟国は10カ国(インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ、ブルネイ、ベトナム、ラオス、ミャンマー及びカンボジア)で、人口は世界の約9%を占める。2000年以降の経済成長は目覚ましく、IMFの貿易統計によると、貿易収支は過去10年で3倍に伸びており、日本の世界貿易の約15%を占める重要な地域である。現在、2015年末に向けて ASEAN共同体を創設する準備が行われているところである。ASEANは、地理的にも我が国と近く、重要な地域であるにもかかわらず、植物品種保護制度の整備は、世界的にみて遅れている。我が国の種苗産業にとっては、これから需要の伸びが期待される地域であり、知的財産権、種苗、生産物等の輸出拡大のためにも、東アジアにおける植物品種保護制度の整備が望まれる。

農林水産省は、ASEAN地域のUPOV(植物新品種保護国際同盟)加盟に向けた支援として、東アジア植物品種保護フォーラムの創設及び活動支援を行っており、筆者が所属する、(公社)農林水産・食品産業技術振興協会(JATAFF)は、平成26及び27年度の同フォーラムの事務局を務めている。同フォーラムの構成国は

ASEAN 諸国プラス日本、中国及び韓国の13カ国で、主な活動としては、各国持ち回りの年次会合、各国における品種保護制度の整備状況調査、各国の要請に基づく法令相談、各国の政策決定におけるキーパーソンや利害関係者の意識啓発、審査技術に関する研修、専用Web siteによる情報の共有・発信等であり、これらの活動を、UPOV、同加盟国及び関係国際機関等と協力して実施している。

ASEAN諸国のうち、現在、UPOVに加盟しているのは、シンガポール及びベトナムの2カ国である。この地域のUPOV加盟が遅れている背景には、FAO(国際連合食糧農業機関)における遺伝資源をめぐる基本的考え方の変遷と、農民の権利をめぐる NGO、国際機関、各国政府関係者の考え方・評価の違いにより、いくつかの国で遺伝資源をめぐる農民の権利に関する条文を加えた植物品種保護法が作成されたことがある。すなわち、UPOV条約と生物多様性条約の2つの条約の国内法が1つの法律の中に混在していることから、UPOV条約との整合性がとれず、加盟できない状況にある。これらの国は、インドネシア、タイ、フィリピン及びマレーシアである。

UPOV加盟国	加盟年月日	加盟条約	対象植物の種類数
日本	1982年9月3日	1991年UPOV条約	すべての種類
中国	1999年4月23日	1978年UP0V条約	290種類
韓国	2002年1月7日	1991年UPOV条約	すべての種類
シンガポール	2004年7月30日	"	11
ベトナム	2006年12月24日	11	90種類

#### 2. 各国における植物新品種保護制度の概要

ASEAN 10カ国の植物品種保護制度の状況は、概ね以下の3グループに分けられる。

(1) すでにUPOVに加盟しており、品種保護制度の運営

が行われている国で、シンガポール及びベトナムが該 当する。

①シンガポールの品種保護制度

シンガポールは、2004年にUPOVに加盟し、10年後の2014年7月からすべての植物を保護対象としているが、現在までの出願は2件(林木)にとどまっている。担当当局は、特許庁である。現在のところ、DUS試験(特性の区別性、均一性及び安定性を調査する試験)は、他国との審査協力により実施することとしているため、自国内に栽培試験農場等を持たず、海外で実施されたDUS試験レポート等に基づき審査を実施する方式をとっている。

### ②ベトナムの品種保護制度

ベトナムは、2006年にUPOVに加盟し、来年の2016年12月で10年を迎える。担当当局は、農業・農村開発省で、作物生産局に植物品種保護室があり、栽培試験実施機関として、国立植物品種試験センターがある。審査は、栽培試験、育成者の圃場での現地調査及び各国との審査協力により実施されており、日本と同様である。現在の保護対象植物は、90種類であるが、1991年UPOV条約の規定により、加盟10年後の来年12月には、すべての植物を保護の対象としなければならない。

2014年末までの出願件数は、560件で、内173件が海外からの出願である。イネの出願が最も多い。現在までの登録件数は、220件である。日本は、2009年から2014年まで、JICA(国際協力機構)によるプロジェクト技術協力を実施しており、農林水産省から専門家を派遣して支援してきた。このプロジェクトにより多くの人材が育成され、ベトナムは、UPOV原則に忠実に基づいた信頼性の高い栽培試験の実施が可能になった。プロジェクト終了後、ベトナムは、UPOV加盟国として積極的に他のASEAN 諸国の支援を始めており、昨年の9月-10月には、イネの栽培試験に関する研修を実施し、本年11月には、トマトの栽培試験に関する研修を実施予定である。この研修に対しては、東アジア植物品種保護フォーラム及びUPOVが、各国からの研修員の招請旅費等の支援をしている。

(2) すでに植物品種保護のための国内法があり、品種保護制度が運用されているが、国内法がUPOV条約と整合していないために、UPOVへの加盟ができていない国で、インドネシア、タイ、フィリピン及びマレーシアが該当する。

#### ①インドネシアの品種保護制度

インドネシアでは、2000年に植物品種保護法が成立 し、2004年に植物品種権の付与及び保護品種の利用に 関する規則が制定されて制度の運用が開始された。農 民の権利等に関する規定があり、UPOV条約との整合性 はとれていない。担当当局は、農業省の植物品種保護・ 農業許可センターである。

すべての植物を保護の対象にしており、2015年5月には西ジャワ州のLembangにDUS(区別性、均一性及び安定性)の試験センターが設置された。2004年からの出願件数は512件で、半数が野菜である。登録件数は270件である。今のところ法律改正に関する情報はない。

#### ②タイの品種保護制度

タイでは1999年に、UPOV条約と生物多様性条約を受けて、植物品種保護と遺伝資源の保護を目的とした植物品種保護法が成立した。この法律は、農民の権利の他、野生植物も保護可能であるなどの規定があり、UPOV条約との整合性はとれていない。

2003年から出願を受け付け、2014年末までに1,152件の出願があり、252件が登録されている。保護の対象は62種類に限定されている。出願の内訳は、林木が49%、畑作物と野菜がそれぞれ20%弱となっている。海外からの出願は、米国からトウモロコシが60品種、日本からイネが2品種となっている。その他、本年2月に日本の国立研究開発法人国際農林水産業研究センター(JIRCAS)がタイ農業局コンケン畑作物研究センターと共同で育成したサトウキビ3品種が、新品種として登録されている。2015年度の行動計画には、法律改正の検討と関係機関の意識啓発が挙げられているが、本年、幹部の大幅な人事異動があり、しばらく時間がかかるのではないかと思われる。

#### ③フィリピンの品種保護制度

フィリピンでは2002年に、植物新品種保護、国家植物品種保護局の設置等に関する法律が施行された。この法律は、農民の権利の規定等があり、UPOV条約との整合性はとれていない。

制度の運用状況としては、2014年末までに223件の 出願があり、160件が登録されている。すべての植物 を保護の対象にしている。今のところ、法律改正に関 する情報はない。

#### ④マレーシアの品種保護制度の状況

マレーシアでは2004年に植物品種保護法が成立し、 2008年から運用が開始されている。生物多様性条約に 基づく農民の権利等の規定が入っているため、UPOV条 約との整合性はとれていない。現在、法律改正の作業が行われており、本年12月に、UPOVの法律専門家によるコンサルタントが行われる予定であり、順調に進めば、来年にもUPOVへの加盟が期待される。

マレーシアはすべての植物を保護の対象にしており、2015年6月までに207件の出願があり、56件が登録されている。出願の50%は、海外からの出願で、全出願の57%が観賞植物であり、次いでイネ、プランテーション林木、果樹がそれぞれ9%程度となっている。キノコについても4件の出願がある。

(3) UPOV条約に沿った国内法はできているが、実際に制度を運用するための規則ができていない等のため、まだ制度の運用が行われていない国で、カンボジア、ブルネイ、ミャンマー及びラオスが該当する。

#### ①カンボジアの品種保護制度

すでに、UPOV条約に沿った植物育成者権法が制定されているが、規則が作成されておらず、まだ制度の運営は行われていない。2016年には、出願手続き等に関する規則が制定される予定とのことである。本年12月には、UPOVの支援により意識啓発及び審査方法に関するセミナーが開催される予定である。

#### ②ブルネイの品種保護制度

本年、植物品種保護令が施行された。ブルネイ経済 開発局 (BEDB) により、植物品種保護室が本年度末ま でに設置される予定である。植物品種保護規則の第1 次案が法務省に提出されている。本年12月に、UPOVの 支援による意識啓発セミナーが開催される予定である。

#### ③ミャンマーの品種保護制度

2015年7月11日に植物品種保護法案がパブリックコメントのため公表され、その後、国会に提出された。 現在、規則を作成中である。技術審査の準備として、 既存品種の収集、特性分類調査、テストガイドライン の作成等を行っている。

#### ④ラオスの品種保護制度

2011年12月に知的財産法が制定され、2012年に特許 及び実用新案法の施行令が制定され、2012年12月に植 物品種の管理及び利用に関する規則が制定された。こ れは、UPOV条約に沿った規定(植物品種著作権法)で ある。担当当局は科学技術省で、技術審査は農林省の 農業局が実施する。現在、出願方法等に関する規則を 作成中。本年12月にUPOVの支援により、意識啓発及び 審査方法に関するセミナーが開催される予定である。

#### 3. おわりに

長い間こう着状態に陥っていると思われたASEAN諸 国の植物品種保護制度が、ようやく動き出したように 思われる。ベトナムの目覚ましい成果に触発されたの であろうか。

学生時代、育種の岩佐教授が、アメリカのポインセチアのカタログを見ながら、「日本には品種保護制度がないから、良い品種が入れられない。」と言われた。それから10年後、農林水産省でUPOVに加盟するための仕事をすることとなった。約2年かかったが、法律の改正と条約の批准(加入)が国会で承認された時、岩佐先生にほんの少しご恩返しができたと思った。その後の種苗会社や個人育種家による品種開発は目覚ましいものがある。ASEAN諸国の農業の発展を心から祈る。

# カリフォルニア・スプリングフラワートライアルツアーを企画して

# **矢祭園芸** 金澤美浩

私共、全国新品種の会は、日本種苗関連6団体の1団体であり、野菜・花卉・花木・果樹・イチゴ等を農林水産省に品種登録をした個人育種家で構成(会員80名)された団体です。今年で創立28年目を迎えることとなりました。

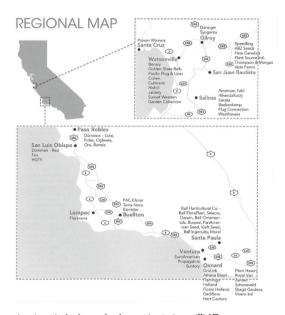
東日本大震災以来、園芸界を取り巻く環境が大きく変化しております。特に私の所属する花卉業界はことのほか深刻に感じられます。この構造不況を打破するために、アメリカ合衆国での生産や販売手法や店舗と生産者の連携方法などを現地で学ぶことは、明日の実践に役立つと信じております。

育種家・生産者・市場・物流・販売店などの明日の 花卉業界を何とかしたいと考える人たちと、世界で一番 早く開催されるカルフォルニア・スプリングトライア ルへの視察で交流を図ることで、新しいアイデアや消 費者への提案がその中で生まれると確信しております。 このような目的でツアーを企画し36名の参加人数と なりました。



結 団 式

成田空港内において結団式を行ない、今回のツアーの目的を確認し、一路サンフランシスコに出発しました。私は一昨年に引き続き2度目のツアーになり、どのくらい育種が進展しているのかがとても興味深く楽しみでした。また米国には日本やEUのように小さなサイズの鉢物を飾るという習慣があまり無いように思われ、屋外のビッグな吊り鉢やコンテナ鉢、広く大きな庭、花壇、どれをとってもスケールが大きく、それを彩る花々やアレンジメントも楽しみの一つでした。



# (1) サカタのタネ サリナス農場





ツアーに参加していただいた是永課長さんによる説明がありました。今世界的な大ヒットになっているサンパチエンスやペチュニア、カリブラコア、オステオスペルマム、メカルドニア、その他、たくさんの自社開発品種が展示されていました。その中で日本の個人育種家のペチュニアが展示されていました。今後サカタのタネ社以外に育種された品種でも広く海外へ紹介して下さるとのことで、海外にネットワークを持っていない個人育種家にとっては誠にありがたい話です。

# (2) シンジェンタ・フラワー





多くの育種会社を傘下に持つ世界有数の種苗会社で、 日本人スタッフによるわかりやすい説明をいただきま した。その中で私が目を引いたのはペチュニア、ペン ステモンや鉢植えの菊、そしてゼラニウムで完成度の 高い品種がディスプレイされていました。かつてはゴー ルドスミス社の農場兼オフィスだったと伺い、周辺の デザイン化された庭と多彩な植物群に納得しました。 清水部長さんや高村マネージャーさんにお世話になり ました。

# (3) ダンジガー社

花壇用の栄養系の花々が主体と切り花の育種開発し

ている会社で、カリブラコアを始めバーベナ、マーガレット、バコパ、セネシオ、ビデンス、その他多くの品種を見ることができました。開発品種の特徴は耐病性や耐暑性に重点をおいて育種をされているとのことです。日本国内では高松商事やハクサンを筆頭に数社が販売代理をしております。

# (4) アーネスト・ベナリー社



「ベナリーと言えばベゴニア、ベゴニアと言えばベナリー」と日本国内でも知られているなじみの老舗種苗会社です。ベゴニアを始めパンジー、インパチェンス、バーベナ類から栄養系、宿根草類まで幅広く育種開発をして全世界120ヶ国に種苗の輸出をしています。1843年の創立以来9世代に渡り花の業界をリードして来たことはすばらしいことです。

### (5) プルーブン・ウィナーズ (PW)



マーケティングやプロモーションを展開して今までの種苗会社とは立ち位置が異なります。世界中の育種家から新品種を集めて試験栽培を繰り返し有望な品種を育苗からラベルや鉢のデザイン、販売店の陳列、アンケートや消費者目線での情報収集に至り、分析をして販売促進のための多額のプロモーション費用をかけ

て世界的に PWとしてのブランディングに成功しており日本の育種家の品種が数多く採用されています。

「フローラ21」の坂嵜潮氏の育成したペチュニアやカリブラコアは PWにおいてもメインの商品と言えます。 忘れてならないのは今回このツアーに参加し、また当会の役員でもある関口政行氏のオステオスペルマムは世界的に大ヒットして PWを知らしめたことが記憶に新しいかと思います。日本国内ではハクサンが PWのメンバーで海外の PWの種苗を紹介しております。展示会場にはペチュニアやカリブラコアを始めビオラ、ダリア、ビデンス、ダイアンサス、その他たくさんの栄養系の品種がありました。

# (6) デュメン・グループの展示会場





フィデス、エッケ、レッドフォックス、バルテル社、 他数社とグループ構成しておりました。ドイツ人の几 帳面さが漂よう雰囲気の会場では、どこの種苗会社と も同じような品種ペチュニア、カリブラコア、ニュー ギニアインパチェンス等、飾ってありました。開花姿 が一糸乱れず、矮化剤を一切使用して無いとの事で高 品質に仕上がる育種力には驚きました。日本国内の代 理窓口であるカクタス長田さんに会うことができ大変 お世話になりました。

# (7) フローラノバ社



ハンギング用の球根ベゴニアやペチュニアのフリンジ咲きなど、他社には見られない物がありました。家庭用野菜もあり、果房が1メートルもあるかと思えるミニトマトや、大きなハンギング鉢で作られたセンナリホオズキ等で、展示も圧巻でパフォーマンスに感心しました。

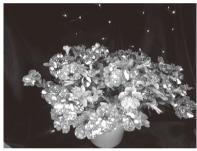
(8) グリーンフューズ



元の種苗会社は米国で有名なボジャーボタニカル社で現スティーブ社長が買い取り、始めました。日本国内で第一園芸との取引きがあり、佐藤和規さんの「ビスタ・エスエス」を通して私と小林孝之さんが米国での販売に踏み出すことができました。宿根草がメインで、低温感応性が無い品種を開発しており、室内でのストレプトカーパスやレックスベゴニアなどもあります。アジサイの半製品苗などもありました。

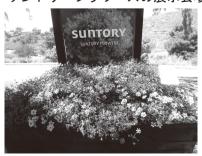
#### (9) ボール・シード





世界で最大の種苗会社で、世界18ヶ国に関連会社を持つグループ企業です。シード開発はパンアメリカン社、栄養系はセレクタ社、宿根草類はダーウィンペレニアル社、その他たくさんの育種会社と提携しております。展示されている種類も豊富でペチュニア、カリブラコア、ベゴニア、アンゲロニア、コリウス、ダリア等、いろんな品種が所狭しと展示されていました。歓迎の挨拶をボールグループの総帥のアンナ社長直々にいただき感激しました。

#### (10) サントリーフラワーズの展示会場



太平洋が一望できる景色の良い公園内にあり、すばらしい品種群の中にセネシオの新花や今回参加していただいた佐藤和規氏の育種開発されたビデンスと福岡県の小林泰生氏のテコマが紹介されておりました。 世界的にヒットして欲しい品種です。

#### (11) ドリスコール社



ベリー類の育種から生産販売、輸出まで幅広く活躍している世界最大規模のドリスコール社を見学することができました。全米で27パーセントのシェアを持つと言われています。従業員とパート合わせて5万人が働いているとの事です。イチゴ、ラズベリー、ブルーベリー、ブラックベリー、会社説明を聴きながら試食させていただきましたが、日本国内でのものとはかなり違い「実が固く日持ちが良く賞味期限も長い、でも甘い」イチゴでした。今後この様な日持ちや輸送性に優れた品種を育成しなければと痛感しました。

このツアーに参加した感想を一言で言うならば、消費者の期待感を裏切らない品種創りと製品造りしなければならないと思いました。暑さ、寒さに耐える事は元より病害虫にも強く、更にカリフォルニア州のように永年水不足で芝生にまで制限されているという事態、乾燥に強い性質をも持ち備えた性質、これらの条件を視野に入れながらより美しく、より永く咲き続ける品種をめざして、皆で協力して研究すれば必ず出来ると思います。会員は元より園芸に関わりのある多くの方々と同じ目線で、米国の花卉園芸の現状を垣間見ることが出来たことが大変有意義な研修でした。ツアーは終えましたが、出会いのきっかけとなり、交流(異なる地域・組織・系統の人々が往来すること)を深め、世界をアッと言わせる花々を咲かせましょう。

# 高知で蘭作りゆうよ

# 有限会社森尾花園

# 森尾大次郎

私は高知県南国市で洋蘭栽培をしている有限会社森 尾花園の二代目です。ハウスは13棟、面積は約2,000坪、 従業員は家族入れて約10人で経営しています。出荷鉢 数は約3万鉢、冬シンビジウム・夏グラマトフィラム・ 春デンドロビウムを出荷しています。

10年前に園芸別科を修了した後、山梨県の蘭の種苗会社「向山蘭園」で2年間研修をしました。今は高知に戻って8年目です。やるからには日本一の生産者を目指しています。

小さい頃は手伝いもあまりせず、園芸別科時代に初めて農業というものに触れました。初めての実習では、当時の花卉専攻の担当教員だった渡辺均先生に、スコップで土の掘り方から指導されたのを今でも覚えています。学生時代にたくさんの植物や花と一緒に生き、育てていくという感覚は今の基礎になっていると思います。

園芸別科を修了後、向山蘭園でラン生産について勉強させて頂きました。研修時代では生産方法はもちろん、らん展などのイベントへの参加、花店への商談、販売店での講習会、市場見学などに連れて行って頂き



ました。この時に、販売店の現状や森尾花園の評価を 外から見ることができました。この時に出会った他県 の蘭生産者、花店や市場の方々には今でもお世話にな り感謝しています。

その後、高知に戻り就農しました。すでにその時には森尾花園の生産技術もある程度確立しており、安定的に品質の高いものを当たり前に出荷できるようになっていました。しかし、自園を含め、ほとんどのシンビジウム生産者は作ってしまえば終わりのような感覚で、できてしまえばその後はただ出荷するだけでした。そのため、どのシンビジウムも同じような商品ばかりで、消費者を意識した商品性の高いシンビジウムは少なかったように感じました。

#### 生産品や販売方法の見直し

そこで、まずは研修中に感じていた自園の商品や出 荷に関する問題点を洗い直しました。

- ・ 商品の規格:直立仕立て、アーチ仕立てに加えて、変わり鉢、寄せ鉢、MIX 出荷などを取り入れました。この花にはこの鉢、MIX 出荷には花色がピンク・白・黄色が入るなど、商品をしっかり決めました。
- 品質の統一感:いつも同じくらいの品質を維持 して出荷することで、花店に安心してセリでも 買って頂けます。または信頼して注文を頂けます。
- ・ 細かな注文対応: 小ロットや出荷間際にもでき るだけ応えるようにしました。
- ・ 情報提供:出荷時期や価格などの商品データを メールで市場や花店に情報提供を積極的に行な いました。
- ・ 営業:市場や花店に直接行って商談を行ないました。

これだけでも1年目から市場・花店の評価は上がり、 販売価格も安定して伸びました。

特にアーチ仕立てにこだわり、森尾花園=きれいなアーチシンビ生産者というイメージを定着させることができました。さらに品評会やらん展などの審査会にも積極的に参加するようにしました。その甲斐もあって、2012年の洋蘭品評会では農林水産大臣賞を頂くことができました。かなり大きく仕立て、完成度の高い商品に仕上げました。この仕立て法を翌年には商品化しました。かなり高単価になりましたが、年間5鉢ぐらい元気な花店に購入して頂いています。この売りにくい時代に10万円以上の花を買う人がいるというだけでもやりがいになり、モチベーションも上がります。

さらには、2014年12月23日に天皇陛下ご誕生81周年 記念として献上させて頂きました。とても名誉なこと だと思っています。



農林水産大臣賞



皇居にて撮影

# 生産・販売の安定的継続のために

しかし年々、蘭の市場価格は低迷し、店頭での販売 価格も低下しています。合わせて、生産経費も上がる 一方であり、全国的にも鉢物シンビジウム生産を続け られなく、やめられる方、鉢物生産から経費がかから ない切花生産に移行される方もいらっしゃいます。生 産量も大幅に減少し、今後は種苗会社からの苗供給も 安定してできるのか分からないところまできています。 その中で、どのようにして生産・販売を継続してい くかを毎年考えなければなりません。

生産面では、苗の供給を日本国内だけに頼らずに海外(タイ)にも委託生産し、苗供給先の分散と苗コストの削減を狙っています。しかし、品種によってはメリクロンができずに苗ができないことや、丈夫な苗が得られなかったり、変異が出たりとリスクもあります。また、納品時期もずれたりするので見極めながら委託する植物を選択し、国内外の動きに合わせて安定した苗供給ができるように考えています。

自分で交配を行なってオリジナル品種の作出も進めています。また、新しい蘭や品種を求めて海外の育種家にも会いに出かけに行っています。オーストラリアで見つけてきたデンドロビウム キンギアナム 'レッドスプラッシュ'は花の模様が特徴的で花立ちも抜群です。東京ドームの世界らん展でもトロフィー賞を受賞した品種です。



'レッドスプラッシュ'

その他には、重油が高騰しているため高温要求性のグラマトフィラムのハウスには木質ボイラーを導入しています。欲しいと思われる時期(売れる時期)は年々狭まっており、そこに合わせた開花調整はより神経質に行わなければならなくなっています。グラマトフィラムは爽やかで涼しげなグリーンの花が特徴ですが、花色にピンクや白がないために仕立てや鉢でいろいろバリエーションを考えなければなりません。現在は夏の蘭、お中元ギフトとして定番商品になっています。



ハート仕立て



ファイヤー仕立て

販売面では市場や花店に出向き、積極的に話をして 顔を覚えてもらいました。商品作りでも自分自身でも 何かしらの特徴を出し、お客様に覚えて頂けるように 常に意識をしています。良い商品が前提ですが、人と 人との信頼関係も大切であると私は思っています。昔 のように生産者は作るだけ、花店は売るだけのような 関係では何も変わらないままです。今は販売店や市場 との繋がりが一番大切であり、お話しをすることで店 頭での植物の状況や問題点を知ることができ、それが さらに改善につながっていきます。また、販売する方 には商品の特徴、育て方、管理方法を知って頂き、消 費者に伝えてもらうことがとても重要です。今は商品 にまつわる話題やストーリー性なども必要な要素であ り、何かしらの共感を得て頂きながら、欲しいと思っ てもらわなければなりません。

# 生産者のグループ化をはかる

販売前には出荷データの情報をメールで案内しています。全国的にも市場でのトレードフェアやサンプル展示などでの前売りが多くなり、計画的に販売していかないといけません。シンビジウムなどの季節商材はどうしても繁忙期が極端に集中するため、生産量やバリエーションを増やすことは難しく、売れるチャンスがあっても逃すことが多々ありました。

そこで、もともと繋がりが強かった高知県の蘭生産者の中で有志を募り「蘭遊 六志会」というグループを作りました。シンビジウム生産量は日本一です。小さいテーブルシンビから大きな特殊品まで揃い、シンビジウム以外でも1年中何かしら蘭があるグループです。そうすることで量とバリエーションが増え、販売先への提案方法も広がりました。シンビジウムを六志会に頼めば何でも揃う!を強みに、積極的に展示会などにも参加してアピールしています。

販売価格がなかなか上がらないため、卸価格も上げられないのが現状です。そこを打開するためにも販売店への売り場作りの提案、販売店限定の商品や新商品の開発など、売る側と作る側とで話をしながら繋がりを強くすることが必要になってきました。 六志会の共通の商品として栽培容器を揃えて栽培しています。 従来のシンビジウムは栽培容器のまま出荷しており、高価な物なのにあまり栽培容器が綺麗じゃない物もありました。それを出荷前に綺麗な化粧プラ鉢にして、シンビジウムのイメージが少しでも良くなるような取り組みもしています。





六志会メンバー



展示会の様子

現在はネットなどの販売方法も多様化しています。 Facebook や Twitter や LINE などのソーシャルメディアで発信もできます。それらを上手に使っていきたいと思っています。これからは大勢に向けて宣伝するより、欲しい人に欲しいと思われる商品を案内する。狙いを絞った宣伝が効果的かと思っています。さらに、売ったらおしまいではなく、その後の情報交換やアフターケアが重要です。

ファンになってもらい、さらに信頼を深めて付き合っていくことが大切です。



Facebookの自分の画像で大きな物も作れるとアピール

これからの課題は市場流通だけに頼らない多様な販売チャンネルを持つことも必要になってくると感じています。

### 1人花普及活動

今まで自分が作っている蘭について書きましたが、 将来的に私は蘭に限らず花の良さをたくさんの人に感 じてもらいたいと思っています。私は営業で東京や大 阪などの人が多い場所に行った時にはブーケを持って 1人で花の普及活動をしています。とても視線を集め ます。1輪でも花は存在感があり、人の心を優しくし てくれます。花は一般の方にとっては、日常的に扱う ことが少なく、特に若い人や男性は花店に入るのにも 抵抗を感じている人も多いようです。

しかし、花を持っている人を見ると周りの人はこれから起きる出来事や、起きた出来事を想像し、幸せな気分になれると思います。見ただけでそんなに幸せな気持ちにさせるものは他にないと思います。その花が自分の作った蘭だったら、どんなに幸せか。そんな思いを持ちながらこれからも花生産、蘭生産を頑張っていきたいと思っています。



東京で1人花普及活動

# 林脩己先生のこと②

# 小 泉 力



林脩己先生肖像

# 林脩己先生の園芸と庭園について

林先生が園芸学部の前身である千葉県立園芸専門学校の創設において、大きなはたらきを為したことは、前号で述べました。それでは具体的にどのような業績があったかを紹介したいと思います。

### 新宿御苑で修業した青年期

鳥取市に生まれ、鳥取農学校を卒業し、新宿御苑の 福羽逸人の下で見習生として学ぶことになった。採用 の経緯は不明であるが、おそらく林の優れた素質は農 学校時代から知られていて、推薦を受けた上だと思わ れる。農学校で既に技術的な能力は完成していて、厳 しい福羽の指導に十分に応えられるものであり、その 後は福羽の一番弟子として明治期の日本園芸界での活 躍が始まることになる。

当時の日本園芸界は黎明期であり一人福羽逸人が孤高を保持し、日本を代表する園芸家として国際博覧会 (フランス) へ出張している。更にフランスに留学し、ヨーロッパの園芸を導入し、園芸書を書いている。当時、日本では今日のように作物別に専門化しておらず、一人で果樹・蔬菜・花卉・造園の全てにわたる知識を持ち栽培し、講演や指導を行う超人的な活動をしていた。

林脩己も福羽を見習い学び、自らも栽培実験を行い 実践力のある青年技術者として園芸界に知られるところとなった。福羽もその力を認めて当時の国家的イベントである第4回内国博覧会(京都市)に派遣し、審査補助員として代理の役割を果たさせている。林はこの時に京都の庭園を視察し、その後の日本庭園に対する認識を深めたと思われる。

# 大隈重信にスカウトされる

明治時代日本の大政治家で伯爵であった大隈重信は、園芸が趣味で邸内に温室を建て、園芸植物を栽培していた。当時、貴族など上流階級では園芸が流行しており、大隈は日本園芸会会長を務める第一人者でもあった。最新の温室はメインのコンサーバートリーを観賞植物で装飾し、国内外の賓客を招いてパーティーを行い、園芸は政治活動の補助手段としても活用していた。この温室を華麗に保つため優れた栽培者を求めていたが、それが林脩己であった。

温室は全て英国からの輸入で、チーク材を使用した 建物で貴重なガラス張り、ボイラー設備も完備してい た。温室の建設は江ノ島に在った日本最大の温室であっ た英国人コッキング氏の温室(現在も遺構あり)を参 考にして林が行った。

大隈邸では22歳から30歳までその任務にあたり、25 名の部下を使役していた。主な仕事は邸内を常に観賞 植物で装飾し、そのために温室では洋ラン、観葉植物、 鉢物の栽培をし、露地では盆栽、西洋野菜等の栽培を していた。

#### 大隈邸での業務内容

この点について当時の記録がある。『風俗画報』第二七三号(明治三十六年東陽堂発行):「大隈伯爵室内の温室」橋本桔梗著 大隈邸での様子を再現してみよう。

大隈邸の温室は、中央にコンサーバートリー (装飾 温室) があり南北にホットハウスが接続している。

設計は<u>小壮植物学者林修己氏之が設計の任に当たり</u> としている。 構造は中央にあるコンサーバートリーは八稜形で、面積二十六坪余 (85.8㎡)、高さ一丈八尺 (5.4m)、煉瓦と切石を腰となし、床にタイル張りで水を注ぐとすぐに吸収し去る。四方に扉、八面に窓を設け、扉も窓も屋根裏も皆ガラス張である。ガラス張の建築物とて、花やかに朝暾夕陽に映じ、八面玲朧、宛も水晶宮の観あり。

温度は寒中でも、中央五十度(10℃)、南室六十度(15.6℃)、北室五十五度(12.8℃)に設定。南室の一隅にボイラーを置き、各室にパイプを通じて暖を送る。パイプは英国最新式のメーンパイプにして、口径四吋あり。



大隈重信邸 コンサーバートリー

# 栽培していた植物の種類

中央温室に栽培する植物は、主に蘭科植物で、南洋諸島、中央アメリカ、メキシコ、マダガスカル、オーストラリア、サイアム(シャム・現在のタイ王国)、ビロマ(ビルマ・現在のミャンマー連邦共和国)、インド等原産の熱帯植物中葉色の美麗な品種を栽培している。花卉は別に中央温室の両サイドに温室を設けてあり、常に培養し花が咲くのを待ち鉢ぐるみ持って来て陳列している。花物類は大抵長くて1か月から10日間位である。凋むと再び以前の温室で管理し、他の咲いた花と交換し中央の一室を装飾している。

松谷子が描いた挿画を見ると中央室のコンサーバートリーでは、大隈伯爵夫人が賓客を招き接待している。画面で大きな植物はシンガポールのヤシ、ヒリッピンの産、八丈島のへボ (ヘゴ)、虎の尾に似た鉢植えは台湾産のセヴラ (一名千載蘭又虎尾蘭)。伊万里焼の鉢に植えて、棚の上に装飾された花卉は、ベゴニア、グロキシニア、コルース (コリウス)、サイクラメン(シクラメン)等にして又南洋産の美麗なる斑文ある蘭科植物を陳列している。

園内を蘭科、花卉、盆栽、菊、果物、野菜、庭園の 七部に分ち、林脩己氏が主任となり園丁を使役して、 各分担を定めて栽培している。果実蔬菜の類は露地栽 培で作り、朝夕食の食事に供している。理科大学(現 東大理学部)付属植物園、宮内省植物御苑に次ぐ、植物標本を蒐集している庭園を有するのは大隈伯爵で、その右に出るものなし。そのため農学校の卒業生で実地研究の為、大隈伯爵の庭園に出入するものが多く、一年、半年、園丁と共に宿泊し練習する人が多い。当時の師範学校、農学校等の生徒は教員が引率して時々参観に来ており、早稲田大学中学では、校内の標本室を見学するように活用している。

#### 大隈重信との関係

大隈重信も熱心な園芸研究家であり自身の著書でも 世界のラン科植物の解説をしている。 (大隈邸写真集 を見ると室内の装飾や温室の栽培状態が見える)

政治家で園芸家の大隈重信を訪れる来客は多人数あ り大広間の座敷が準備されていた。対応は息女の大隈 熊子が対応し取り仕切っていた。この様な職務の中で 林は当時の日本で最も進んだ園芸を行っており、その 間にも名声が広まり国内からの指導の要望があって、 これにも対応していた。例を上げれば穂坂八郎名誉教 授(大正10年卒)が学生時代に林講師に引率されて大 山巌元帥邸の温室の管理をしているのを見学している。 余談になるが大山巌は日露戦争を勝利に導いた将軍で あり陸軍大臣・元帥・公爵となった人で、ヨーロッパ に留学し、洋風好みで自宅はディズニーランドのシン デレラ城の様であった。妻は鹿鳴館の貴婦人と謳われ た大山捨松で、アメリカに留学していたので夫婦の会 話は英語でするという家庭で、温室の管理は林の指導 に任されていたと思われる。他家の温室も請け負って いて、あっちこっちに連れて行かれ見学したと穂坂先 生が発言している。

# 英米仏に留学

明治37年(1904)に農商務省の海外実習練習生として選ばれ英国に派遣されることが決定し、大隈邸を去ることになった。当時、政府は海外の産業を習得させるために世界各地に研修生を派遣していた。大正6年12月1日現在の『海外実業練習生一覧』(農商務省商工局発行)によれば、明治29年から大正8年までに707名が派遣されており、園芸業は22名であった。

#### 参考)

明治37年度は2名で林の他に本間啓太郎が米国に派遣されている。

明治42年に坂田武雄(サカタのタネ創業者)が米国 に派遣されている。

#### 英国での研修

林が渡英した明治37年12月に書いた手紙があり、これが日本園芸会雑誌に再録されており、渡航当初の様子がうかがわれる。これは東京市の公園係担当の長岡安平に宛てた私信であったが、その内容が英国の様子を知るのに役立つとして当雑誌に再録したものである。

これによれば英国に来てはみたものの、どこで研修したらよいか分らず1カ月が過ぎた。どのようにして園芸会社にたどり着いたかは不明だが、交通手段は主に馬車で、さしずめ御者にでも捜させたのか現在のタクシーの様であったかと思われる(当時地下鉄や蒸気機関車もあった)。

当時のロンドンに園芸会社は多数存在したが、中でも有力な会社は現在でも存在するサットン社とヴィーチ社である。当時の園芸会社の温室や栽培農場は林の 腎肝を抜くような大規模のものであった。林はそのことをかなり細かく書き送っているので紹介してみよう。

「英国第一等の園藝社に就て、明春まで実地の取調を遂ぐることを相約し候。該社は、倫敦に一の会社を有し、其他四ヶ所の養樹園あり、倫敦の本店には温室四十餘棟及び種子部若くは事務所等あり。而して、他の四箇所の養樹園は倫敦距ること六七里外、園の面積二十五町歩乃至四十町歩あり温室の如きも一ヶ所に大概二三十棟を有し、各々植物の種類を分別して栽培せり。詳言せば果樹・蔬菜・庭木・花卉若しくは道路の並木等種々分類せられ居候。」

英国の園芸がこの様に発達したのは気候が嫌悪であったのでこれを克服するために、寒冷で曇天の冬に栽培ができる広大なガラス温室を建てたと言っている。また、英国では全てが学理的であり実験に基かないものは評価されず園芸も専門分化しており、日本のように浅く広く何でも知っている風ではない。既に現在の日本の園芸産業のように専門化しているので広く浅く学ぶには不便だと言っている。

#### キューガーデンに学ぶ

その後英語学校に通学し、キューガーデンにも学ぶ ことができた。

『大正天皇御即位記念 人物と其勢力(鳥取県の部) 林修巳君』によれば

「最初倫敦市ピットマレス学校に於て英語学を修め、 38年6月より1ヶ年英国立園芸会員となり、園芸学 の講義に出席し並に同会付属園芸試験場に実地及品評 会出品物審査法を研究す、又政府公園課長セキスヒー 氏の門に入り、一般庭園に関する講義を聴き博士ウイルソン氏に師事し園芸植物の研究をなす、」 とあり本文からもキューガーデンで学んだことが分る。

林はキューガーデンで大きな役割を果たしている。 それは日本の園芸についての講演と菊の歴史について の執筆である。

英国王立園芸協会 (RHS) 会長から日本公使館を通 じて「日本の園芸について」の講演を依頼された。大 変な名誉と考えて臨んだその時の原稿が同協会雑誌に 英文で掲載されている (1906 JOURNAL OF ROYAL HORTICULTURAL SOCIETY) (1905年5月9日受理・明 治38年)。英語での講演内容が帰国後に日本園芸雑誌 に紹介されている。これによると日本の歴史を「神武 天皇即位以降皇紀二千五百六十有余年を経たる古国な りとも云えども」から始まった歴史について述べ、徳 川の太平の時代に日本の園芸が頂点に達したこと、明 治維新後の荒廃等を長文で述べている。明治の園芸界 については趣味家団体として菊、朝顔、蘭、万年青、 桜草、薔薇の会を上げている。日本の園芸作物は蔬菜 16種(マクワウリ、キウリ、アカナス、インゲンマメ 等)を簡単に紹介している。日本の歴史を多く語った 講演内容は、ロンドン公使館の意向もあったためでは ないだろうか? 時あたかも日英同盟が結ばれ日露戦 争の最中であった。林はこのような時代に英国に滞在 し、日本を代表して国威発揚を果たした。

上記論文と併せて「日本の菊」(CHRYSANTHEMUM KIKU The History of Chrysanthemum Cultivation in Japan By N. Hayashi)についても投稿している。日本独特の菊花壇の写真や美しい菊の図を掲載し分類しているが、大菊、中菊、小菊を更に形態的に細分化した分類で、今日流布している分類法の原点となるものであり、この論文は日本で最も早く花型による形態的分類を紹介したものと思われる。この論文の中で日本の野生菊について解説し、皇室と大隈伯爵家で栽培しているとの記述は興味深い。

#### 留学中の西洋庭園視察

英国留学に当たって東京市長よりロンドンの公園についての調査依頼があったが、この公式報告は現在発見されていない。しかし、成田山仏教図書館林脩己文庫の「庭園に就て」の文中でロンドンの公園についての記録がある。

フランスへの渡航は前記「庭園に就て」の中でヴェ ルサイユ宮殿の記述がある。その中でトレアリノーを 見てフレーネの設計だと書いている(これはフランス 革命でギロチンに処せられたルイ16世と悲劇のヒロ イン、マリー・アントワネットの遊んだ田舎屋である)。

また、英国式庭園は英国でウイリアム・ケントにより創設されたが、その後フランスで更に洗練されたのは、フランスの芸術的な伝統によるものと書いている。

米国への渡航は「庭園に就て」の中でニューヨークでは屋上に野球場があり学生や丁稚(若い労働者)が野球をやっていると書いている。屋上で正規の広さの野球場ができたのか疑問であるが、キャッチボール程度ならば可能であろう。

米国へは英国から往復し、その後に渡仏したのか? 米国経由で帰国したのか? ロンドンから来た道のスエズ運河経由で帰国したかは不明である。

#### 三菱財閥の岩崎家高輪別邸で園芸主任となる

帰国後は予てからの約束通り岩崎家に雇われた。岩 崎彌之助の高輪別邸の建設が明治の建築家ジョサイア・ コンドルの設計で行われ、庭園の設計は福羽逸人と林 脩己が行い、庭園の施工は林が全てを取り仕切ってい た。工事は低地を埋め立てて芝生庭園を造ったが、軽 便鉄道を敷設し公道を付け替えるなどの土木工事であっ た。完工後には広い芝生の西洋庭園となり、日本では 見られなかった華麗なデザインであった。

しかし、施主の岩崎彌之助が病を得て逝去しこの邸 宅に住まなくなったので、林がここで庭園管理を行う 意義が薄れてしまった。

### 千葉県立園芸専門学校の講師となる

この頃に時期を一つにして松戸の戸定が丘に園芸専門学校を造る計画が浮上した。校長は鏡保之助で京都府立農林専門学校校長からの転出であった。鏡校長は千葉県に園芸専門学校を作るに当たり、大隈邸園芸主任当時から有名であり、英国留学し帰国後岩崎別邸の庭園を造った実績のある林を必要としていたと思われ、岩崎家退職と重なり林を紹聘することとなった。

林は戸定が丘の園芸学校に理想の西洋庭園を創る構想を持ち、現在も残るイタリア式庭園、フランス式庭園 (サンクガーデン)、イギリス式庭園 (旧正門の右側で現在は樹木に覆われているが当時は広い芝生に東屋があり江戸川を前に遠く富士山を見る眺望であった)と岩石による日本庭園である。

授業は講師として装飾植物(花卉園芸)・庭園の講 義と庭園実習を担当した。

# 室内花壇

林講師の具体的な授業内容について考察してみよう。 明治42年に千葉県庁の新庁舎落成にあたり共進会が行 われた。園芸専門学校からは室内花壇の出品があって 数10種類の草花が使われていた。写真と堀江正章の油 絵が残っているが、当時の学校での花卉栽培の様子が うかがわれ、林の指導であったと考えられる。この花 壇で使われている花卉については園芸学部 100周年記 念に発刊された『庭園の記憶』に藤井英二郎教授ご夫 妻と安藤敏夫教授による植物名の同定が行われており、 ダイアンサス (ナデシコ)、ペチュニア、ダイアンサ ス (カーネーション)、ドラセナ、ナスタチウム、マー ガレット、カラジウム、グロキシニア、フクシア、ベ ゴニア、テーブルヤシ、アマリリスのような花、ダリ アのような花、この他安藤教授の同定ではキク、マー ガレット、パンジーも描かれている。絵画は必ずしも 写実ではないとの評である。私の鑑定で追加するのは、 ククラツス (大銀竜)、木立ベゴニア2品種とダリア である。



堀江正章:室内草花図(油彩)

この室内花壇は共進会の開催期間が5月5日から20 日までなので、この間の展示に適合した開花期を考え た植物を選択している。今日のゴールデンウイークに あたり花卉は選択幅の多い季節であり準備し易い。展 示のためには必要な植物数の数倍の鉢植えを松戸の温 室で準備しておき、運び入れて室内花壇を作成し、展 示会場では灌水など鮮度保持を常時行う必要があった。

最も注目すべきは室内花壇のデザインである。この 様な数百鉢の花卉を組み合せた花壇はこれまで日本で は誰も考えたことがなく林の独創的なデザインと考え られる。共進会のメイン展示であって、有料な中での 唯一無料の展示で客寄せの目玉であった。一般的な花 壇はビビットな花を組み合せた毛氈花壇が主流である のに対し、葉の色(カラーリーフ)を取り入れた色彩 の組み合わせは画期的である。この様な独創的なデザインを着想したのはヨーロッパの庭園や花壇を見て来 た林ならではと考えたい。

#### 学生の指導

林先生について調べる中で、吉池貞藏氏(昭和30年卒)にお聞きしたところ手紙が届き、永島四郎氏(大正10年卒)の著書『花のデザイン』のはしがきに、林先生がキューガーデンで学ばれた花の専門家であると記録されていた。永島氏は林先生のアドバイスを受けて花卉装飾の将来性を予見して単身渡米、日本最初のフラワーデコレーターとなってこの道を開いた経過を書いている。

更に次の短歌が添えられていた。

「胸高にガーデンエプロンかけて居たまひし林脩己先 生を思ふ」

短歌集 北風南風 埴科史郎 (ペンネーム) より 英国仕込みのスタイルで剪定指導をしている写真が ある。当時の学生には眩しく映った先生の想い出であ ろう。

# 「母校の歴史を語る会」から

本校発足当時の様子は「母校の昔を語る会」昭和 17年5月24日の座談会で林先生を囲み、岩田喜雄 氏(第1期卒)等が庭園造りの苦労話の想い出を語り 合っており、その時の事を林は実に細かく記憶してい る。なお岩田氏は初代戸定会会長である。

この座談会の中で本校存亡の危機を救ったエピソードがある。それは県立の専門学校であるが県外の学生が多く、また庭園や花作りは千葉県の果樹や野菜の生産に役立たないと県議会から異議が出て廃校が決議されてしまった。その時に同窓会の同志が相談して当時の政治家にはたらきかけて廃校を撤回させることができた。これには当時日本の政界を二分していた憲政会と政友会があり、憲政会は大隈重信系の政党であったので林が大隈に直接はたらきかけたと考えられる。一方の政友会は伊藤博文系の政党でこれは別の同窓生が運動して廃校を免れた。千葉県知事も面目がたち無事まるく納まり、その後国立移管となった。林先生は母校を創り、母校を救った恩人でもあった。

# 千葉県に転出

明治42年から大正12年まで13年8ヶ月園芸専門学校の講師として勤務した後に、千葉郡都村(現千葉市中央区都町)に新設された千葉県立農事試験場園芸部長として転出し、千葉県の園芸農業に貢献することになった。又、成田山公園を完成させた。紙面の都合でこれらの業績についてはまた別途書いてみたい。

# 浅山英一先生が見出したストック品種の遺伝子を活用した黒川さん父子の育種の大きな成果

#### 林 角郎

千葉県館山市にある株式会社クロカワストック(以下、KKクロカワ)は平成23年(2011)に日本フラワービジネス大賞2011を受賞し、その後もさらに実績を重ねており、現在わが国で生産するストック切花のあらかたが同社育成品種で占められる状況となっています。

この同社ストックの主力である2品種群とその他の品種育成に浅山英一先生が着目した'松戸赤'の遺伝子が大きく関係していることはあまり知られていないと思われるため、今回その内容を説明したいと思います。

#### 2012年 花き品種別流通動向分析調査 (ストック切花)

#### 日本花普及センター調査資料より

品種区分	品種数	取扱数量 (千本)	同 比 率 (%)	1 品種数量 (千本)	取扱金額 (千円)	同比率(%)	平均単価 (円)
カルテット群	27	7, 953	36. 5	295	665, 804	39. 3	83. 72
アイアン群	14	7, 883	36. 2	563	641, 196	37. 9	81. 33
その他前 <sup>(注1)</sup>	14	1, 908	8.8	136	105, 732	6. 2	55. 42
その他後 <sup>(注2)</sup>	22	1, 690	7.8	87	99, 847	5. 9	59.06
黒川系以外	116	2, 351	10.8	20	180, 958	10. 7	76. 98
全体集計	193	21, 786	100	113	1, 693, 538	100	77. 74

注1:「その他前」は上段2群以外の平成14年以前発表の黒川系育成品種 注2:「その他後」は上段2群以外の平成15年以後発表の黒川系育成品種

注3:資料は全国主要市場25社を対象に同センターが行った調査から計算し、

数量・金額は千以下の単位を折略、四捨五入。

# 1. 流通動向調査の結果で示されるストック 切花の品種間の動向

表に示されたデータは日本花普及センターが行っている花き品種別流通動向分析調査における平成24年(2012)のストック切花の結果から、筆者がKKクロカワの育成品種を区分し、その他品種と共に集計・解析したものです。これによりますとまず取扱数量・取扱金額とも同社の主力品種群である「カルテット群」と「アイアン群」で7割以上と圧倒的シェアを占めていることがわかります。その他のKKクロカワの育成品種も多く利用されているため、黒川系以外の品種は116品種もありながら数量・金額とも1割前後という状況となっています。なお「その他前」は初代の黒川浩氏(以下、浩さん)が育成し現在も利用されている品種、「その他後」は主として現社長の黒川幹氏(以下、幹さん)が育成した品種です。これら品種中にも、松戸赤、の遺伝子が関係する品種もありますが、本

稿では前2群を中心に述べます。

なお同社では育成した品種のすべてを採種して、その種子をこれまでは国内で販売してきましたが、近年はかなり海外へも販売しております。この点も注目すべきことですが、今回は割愛します。

### 2. 黒川父子のストック育種における活動経過

まず初代の浩さんは昭和25年 (1950) 春に地元の安 房農業高校を卒業後直ちに花産業に着手し、ストック の切花生産を行うと共に、当時安房地域の露地切花生 産に多く利用されていたピンクの分枝系ストック '淡 紅'の中から、紅色の個体を選抜固定化する育種活動 を始めました。この結果、目的の品種が得られたため 昭和31年 (1956) に '黒川早生'と名付けて発表し、 その種子をすべてご自身で採種し種苗会社を通じて販 売しました。 その後も交配育種を行い、それぞれの時代の消費動向 にマッチした品種を数多く育成し、その種子を生産し てきました。

その後ご長男の幹さんは昭和59年(1984)に静岡大学農学部を卒業後、昭和60年(1985)から実家のストック育種と採種に従事し、平成9年(1997)頃から父に代わって業務を担当、平成22年(2010)にKKクロカワを設立、社長としてそれまで以上に事業を推進しております。こうして平成23年(2011)までの当初からすべて含めた育成品種の総数は122品種に及び、その後も増加しています。

この中で現在もアイアン群とカルテット群に主力を おくほかにイエロー系や複色など新しい花色の開発に も力を入れ、さらに分枝系や花壇用矮性品種など別な 形質の品種シリーズも発表しています。

# 3. カルテット、アイアン両品種群の形質の特長

カルテット群では当初、茎は1本立ちで生長しますが、一般の場合と違って各葉腋に小さな芽を持っています。しかし下部の芽は伸長せず発蕾期になってから上部の数本の分枝が伸びてそれぞれに花房がつき、下部の花から開花します。分枝間では先端かそれに近い枝から開花しますが、間もなく全部の枝がスプレー型



カルテットホワイトハーモニー

に咲いて豪華な花房となります。そして花茎は主茎も 分枝も非常に強くしっかりとしています。

もう一つのアイアン群は形態的にはこれまでの一本立ち系と同様ですが、花房には多数の花が密につき、個々の花は花梗が短く花は大きいため満開時には見事な円筒形(カラム状)となります。そして何より大きな特長は茎の硬さで、アイアンの名のとおり剛直な茎が際立っています。

この両品種群の性質は、ユーザーである小売商や消費者の立場からすれば利用上きわめて都合がよいため、消費が伸びているわけですが、育種当初には市場側の理解が少ない時期もありました。まずカルテットについては、従来のスタイルとかなり違っていたため、東京の大きな花市場の社長でさえ当初難色を示していました。その後、小売商の間で1~2本を挿しただけでかなり広く埋まると評判となってよく使われるようになり、その社長も率直に前言を訂正していました。またアイアン群についても茎が硬すぎるため、もう少ししなやかさが必要という意見もありましたが、茎の強さと併せて水あげの良さもあり人気が徐々に高まり、現在ではその花容の雄大さもあって、前述の市場調査でも 'ホワイトアイアン'が圧倒的な売れゆきを示し、その他の品種も上位を占めています。



ホワイトアイアン

# 4. カルテット、アイアン両群の品種育成のルーツ

これら2群の品種を育成する最初の交配は昭和54年 (1979) に浩さんの手で行われました。この交配は、その前に育成されていた赤色分枝系品種 '彼岸王'と白色一本立ち系の品種を交配し、その結果5つのきわめて特長ある系統を得ました。このすべての系統がその後の育種に利用されましたが、なかでも最初1本の茎で伸び上部で分枝する性質と、一本立ちできわめて茎が強い2系統に着目しました。このタイプはともに片親の'彼岸王'にみられる性質を確実に受けており、浩さんが育成を想定していた現在のカルテット群とアイアン群の性状にマッチするものでした。このうちスプレータイプの性質はストックでは全く存在しなかった形質ですが、その頃に各種切花で導入されていたスプレータイプにヒントを得て浩さんが独自に考えたものでした。

その後このスプレータイプの母本に各色の品種を交配し、いくつかの花色の品種を得て平成5年(1993)にホワイト、チェリー、ピンク、ブルーの4品種を登録し(登録系統名はカル)、以後順次他の花色の品種を育成登録、さらに平成9年(1997)からは幹さんの手により育種活動が続けられています。

また、現在のアイアンタイプについては当初から主 として幹さんが交配を行い、平成11年(1999)に6品 種を発表したのち、やはり毎年新しい品種を発表して います。

### 5. その後の幹さんのストック育種業績

前述のように会社設立後、幹さんは他のストックの 育種と共に特にカルテットとアイアンの2群について 切花利用の幅をさらに広げるため、花色を中心に早晩 性やオールダブル系など多くの形質を取り入れていま す。特に花色についてはこれまでに発現されている単 色のほかに花弁の基部と先端部の色が違うストックに はなかった二色花の品種育成を手がけています。また 別にストックでは従来存在しなかった黄金色の花色を 目指してクリーム色の花色からさらに黄色に近づける ようつとめ、より濃い花色の品種も得られています。

昭和57年(1982)頃から他社で白とクリームの花色 品種について種皮で八重を鑑別できるオールダブルの 形質が開発されていますが、KKクロカワにおいても 主要品種群について、その形式を取り入れた品種を独 自に育成発表しています。

# 6. さかのぼって'彼岸王'の育成について

ところでこれら黒川系品種の育成で前述にあるよう 母親として利用した'彼岸王'は昭和45年(1970)に 浩さんが従来品種の'松戸赤'に分枝系早生の '寒千鳥'を交配して育成したものです。その頃まで '松戸赤'は安房地域の露地切花生産に利用されてい ましたが切花品質にはすぐれるものの開花が遅く、春 の彼岸に間に合いませんでした。それを彼岸出しに利 用できる品種としたものですが、その後、浩さんはさ らに同じ形質の'新彼岸王'を育成し昭和62年(1987) に発表しています。



彼岸王

これらの育成品種は母本の'松戸赤'とは形質に若 干違う点はあるもののよく似ています。草丈は一般の 分枝系品種よりやや低いものの茎は硬くしっかりして おり、葉も厚くやや強い打込みがあってしまっていま す。そして切花後の水あげが抜群に良く、これが切り 花の寿命を長くする要因となっています。この茎葉の 強さ、水あげの良さを新しい品種に利用することが浩 さんの狙いであったわけですが、この目的通りカルテットとアイアン両群の各品種に見事に受け継がれ、前に 述べたそれぞれの特長ある形質の形成にも大きく役立っ ています。ここに育種の成果の偉大さを改めて認識するとともに、すぐれた形質に着目しこれまでになかった た品種群の育成をはかった黒川さん父子の天才的な育 種感覚に強く感銘されます。

#### 7. '松戸赤'のルーツとその後の経過

これまで述べてきた'松戸赤'の由来については平成13年(2001)4月花葉会発行の『青い花への追憶一浅山英一先生を偲ぶ一』のp40~41に筆者が述べてあり、多少重複しますがその他の事項も入れて以下に述べます。

筆者は終戦の翌年昭和21年(1946)5月に現在の千 葉大学園芸学部の前身である千葉農業専門学校に入学 しました。当時、浅山英一先生はその年の春に復員さ れ花卉研究室の農場復興に努力しておられました。秋 には先生はアメリカのボール社からストックの主要品 種の種子を購入し、温室の廊下部のベンチで栽培して 学生達にストックの品種特性などを説明しておられま した。当時同級生の中に大倉明さんという学生がおり、 家は東京の世田谷区玉川にあってお父さんの小田茂さ ん(姓は違いますが)は東雲園の名で温室経営をして いるとのことでした。その大倉さんは学校のストック を見て、参考のためにお父さんから家で栽培している ストックの種子を分けてもらい '玉川赤' という品種 名で浅山先生に提供しました。その品種はそれまで東 雲園で長く採種を続け切花生産をしていて市場受けの 良い品種とのことでした。先生はその秋に播いて温室 内で他の品種と共に栽培されました。

この性状は本稿ですでに述べた '松戸赤'と同じため省略しますが、打込みがある肉厚の葉や基部で分枝して咲く様子は、浅山先生がボール社から導入した品種中の 'エルクスプライド' (または 'イールクスプライド') という濃紫色の品種と花色や葉色は違うものの葉や茎の形状がよく似ていました。

その後、筆者は昭和24年(1949)春に卒業し、千葉 県職員となって2年後の昭和26年(1951)に当時の県 農業試験場安房分場に転勤し、花の試験研究に従事し ました。この時期、学生時代にみた'玉川赤'が '松戸赤'の名で昭和24年(1949)頃から希望者に種 子が販売され、安房地域の花生産者の間にも普及して いました。この露地栽培の花は開花は遅いものの市場 での評判が良くて高く売れる点で好まれており、筆者 自身も同分場内の露地栽培で咲いた花を4月に東京市 場へ出荷し、意外な高値で取引された記憶があります。

当時、千葉県では南房総地域の園芸開発のための研究を千葉大園芸学部に委託していましたので、花卉部門では穂坂教授以下、浅山先生やその頃助手であった岩佐吉純さんが現地の栽培者の所に調査でよく来ており、先述の浩さんも調査担当者であったことから圃場を訪れ'松戸赤'についても話し合っていたと思いま

す。以後の育種の経過はこれまで述べたとおりです。

最初の'玉川赤'が花卉の温室ではじめてつくられた昭和22年(1947)から数えて今年平成27年(2015)は68年目となりますが、この長い年月の間にも優れた形質は失われず、むしろ立派に花咲き、利用されているわけです。

謝辞 本稿の最初に引用した市場取扱状況のデータは財団法人花普及センターより資料をいただき、また原稿の作成にあたっては黒川浩さんならびに株式会社クロカワストック社長の黒川幹さんにご協力を賜り、添付の写真は株式会社ミヨシより借用いたしました。ここに合せまして厚く御礼申し上げます。

# ▶表紙解説

# ロサ・ペルシカ

# 長 岡 求

今年の花葉会ツアーはカザフスタンを選び、5月29日に成田を出発、6月6日に帰国した。カザフスタンは西のカスピ海から東の中国の間に横たわり、北側でロシアと接し、南側は天山山脈に続く山脈などを境にしてキルギスやウズベキスタン、トルクメニスタンに接する。中央アジアといえばカザフスタンとその南に位置する三か国にタジキスタンを加えた五か国からなる地域をいう。カスピ海の東側にはカラクム砂漠が広がり、それを囲むように温帯草原(ステップ)があり、農業は牧畜が中心となる。また南東部には高地地中海性気候と呼ばれる、夏に乾季をもつ気象条件をもつ地域があり、やや雨が多いものの風景としては草原が広がる。

今回の宿泊地はアルマトイ(Almaty)と、シムケント(Shymkent)の近くにあるジャバグリ(Zhabagly)。アルマトイはカザフスタン第一の都市(首都はアスタナ)で、キルギスのすぐ北側に位置する。気候は高地地中海性気候となり、南側にある天山山脈から流れ出る水が豊富なことからアルマトイの街中は高木が茂る緑豊かな町だった。ツアーでは天山山脈にあるイレ・アラタウ自然公園(Ile-Alatau National Park)を中心に視察した。もう一か所のジャバグリは西天山山脈の麓の村で、アクス・ジャバグリ自然保護区(Aksu-Zhabagly Nature Reserve)の中心にあり、アルマトイに比べると雨量が少ない様子で、乾いた草原が広がっていた。滞在中は毎朝ジャバグリを出発し、周辺の山岳地に出かけて自然観察を行った。

表紙写真はロサ・ペルシカ(Rosa persica)で、ジャバグリの北方のカラタウと南西のアクス峠の2か所でみることができた。カラタウは『黒い山』を意味するカザフ語で、今回訪問した中では最も乾燥していて、山は見るべき植物も少なかったが、春にはチューリップの花で山全体が黄色や赤に染まると聞いた。ロサ・ペルシカは、その山の中でもあちこちに育っており、かなりの乾燥に耐えることが推測された。もう一か所は西天山山脈を越えてキルギスに至るアクス峠に至る

途中で発見した。カラタウに比べて雨が多いのか、草 原の緑が保たれ、ロサ・ペルシカが育っていたのは道 路わきのがれた裸地であり、群落を作っていた。株の 育ちは後者のほうが良く、写真もそこで撮影したもの。 ロサ・ペルシカについて調べると原生地はアフガニス タンからイラン、中央アジアから西シベリアまでと、 かなり広い範囲に分布を広げる。自生環境はステップ から砂漠にかけてで、深根性で栽培は難しいとある。 また樹高は60~90cmとあるが、私たちが見たものは15 ~20cmほどだった。葉表はろう質で、葉縁にはヒイラ ギのように棘があり、茎や果皮の表面にも針状の固い 棘が密集していた。バラ属の中では特異な形質をもち、 Hulthemia persicaとして別属に分ける学説もあるが、 バラ属の他種と種間交雑が可能であり、我が国でもペ ルシカ・ハイブリッドとしていくつかの品種が入手で きる。

今回のツアーはラタウを除き、宿泊地から南に谷筋を変えながら山に分け入り、ところどころで車を止めての花の観察会となった。どの谷筋も植生は比較的単純で、目にする種数は少なめだったが、不思議と谷筋が変わるごとに植物が変わり、面白かった。私自身、全部で2千カットほどの写真を撮り、230種ほどの種を認識することができた。

# 庭の花材あれこれ

# 花 岡 喜 重

#### はじめに

ひところのガーデニングブームは、一休みといった ところと思われ、少々気後れするところですが、若干 の宅地を活用し、庭造りをしました。造り始めてほぼ 二十数年、あれこれ得られるところもあり、独断なが ら述べることにしました。庭の構成は、各コーナーの 環境や景観に配慮しながらも特徴のあるものとし、い ずれも周年観賞を前提に花材の組み合わせ、植栽の方 法を試みました。

この庭の造成地は北関東平野部で、気象条件は冬の最低気温-5℃前後で晴れの日が多く北風が強い、夏の気温は極めて高い地域です。造成にあたって一般的でない条件もあるので、それらをあげておきます。植え込み地の植栽は、据え置きの植栽を主にしますが、その間に花木・宿根草の一部を鉢植えか不透根シートの根巻で移植し、季節の景観作りに利用しました。したがって移植地を設けて株を移動し、また寒さに弱い種類の冬越しには、ビニールハウス(最低温度 $2\sim3$ ℃)を使用しました。



庭の主要な部分 西側から H25.9.8

# 窓辺の緑陰コーナーにボーダー花壇

玄関先の直接視界遮蔽や窓辺の緑陰コーナーに、ボーダー花壇を設けました。この場所は公道に面し、西日が強く冬の北風が強い場所で、排水条件は良いです。

夏冬の切り替え時期は概ね5月と10月で、この時期に草花を主に植え替えしました。一部に這性のコニ

ファー・マサキ・アイビー・ハツユキカズラを植栽し、 冬季の花材を補いました。夏花壇には宿根草であるミ ソハギ・クサキョウチクトウ・ルリマツリ・ヒメヒマ ワリ・ヤナギバヒマワリなど、一部に一歳サルスベリ を、秋にはアロニア (赤実)を使いました。花材は鉢 植えとシートの根巻による移植で、常に花のある花壇 を試みました。

この中で高温期でも褪色がなく生育も順調で、刈り 込みや摘心による草丈の調節ができ、花期も長い種類 にミソハギ・クサキョウチクトウ・ルリマツリがあげ られます。また花壇の背景の植え込み地に大型のアジ サイ(カシワバアジサイ・アナベル)を初夏に、盛夏 に一歳サルスベリ、夏秋にシマススキ・アロニア(赤 実)で野趣を演出してみました。



夏 H26.7.9



冬 H27.1.4

冬花壇は据え置きの植栽を活かしつつ、低温寒風に耐える種類の選定を課題としました。オタフクナンテン・コニファー(主に黄色系)など一般的な種類の他に、キンポウジュ・ジャノメエリカ・ギョリュウバイ、草物としてビオラ混色・アリッサム・シロタエギクを使用しました。キンポウジュ・ジャノメエリカ・ギョリュウバイは、いずれも低温害は見られず、庭園樹として使用できることが確認できました。特にジャノメエリカは11月から翌春4月まで開花し、厳寒期に若干の被害がある程度で、冬の主要な材料となります。ギョリュウバイも秋冬咲きは少なくないですが、春咲きの花材として重要と思われました。

#### 建物の隅地

この場所は冬季の寒風が避けられ、夏は玄関と主庭 の境に遮蔽を兼ねたツバキが植栽されているため、強 い日射が避けられる小花壇です。



夏 H27.8.16



冬 H26.11.28

夏の花材は日陰に適する種類で、ベゴニア・インパチエンス・コリウス・オリヅルランなどと、宿根草のヒューケラを使いました。それぞれに損失があり、インパチエンスは徒長的な生育で梅雨明けから病害が出

やすく、ヒューケラは高温期にやや弱いですが、植え付けの仕方で改善がみられます。なお、壁際にアナナスの流木付けを置き、アクセントにしました。

冬季は寒風が避けられるので、ヒューケラを据え置いて、ガーデンシクラメンを主材としてプリムラ (ジュリアン・マラコイデス)を植えています。このように寒風を避けられる場所でもシクラメンは12月下旬からは寒害を受け、翌春には被害の大きい状態となりました。ジュリアンが寒害を受けながらも観賞できる状態で冬越しできます。品種改良の進んだマラコイデスは耐寒性に乏しいですが、在来品種はやや強く、高木内の陰地などでよく育ち、早春によく咲きます。

#### 建物の遮蔽を兼ねた植栽地前のボーダー花壇

南に隣家があるため、遮蔽を兼ねて高木を植栽しま した。樹種はツバキ・サザンカ・ナツツバキ・サンシュ ユなどです。環境条件は夏は半日陰、冬は3月まで日 陰の状態です。



夏 H25.6.11



冬 H26.3.8

夏の花壇はギボウシを主役に、その間にベゴニアを 植え、周辺の植栽間にはバラのスタンダードと初夏に アジサイ類、夏秋はサルスベリなどを配置しています。 このバラのスタンダードは、7月に緑枝の接ぎ木挿しをしたもので、台木50~70cmを用い、密閉挿しをすることにより短期間で養生でき、花壇に立体感を出すことができました。

冬季はほぼ日照がないので、ハボタンを主にオタフクナンテンを混植しています。このような日陰地ではハボタンの白系が際立ち、葉色の新鮮さを保ちました。 植栽の中では花の少ない厳寒期にアカバナマンサクが花木として有効でした。

# ベランダの花材

ベランダは周年の観賞を前提とし、種類や利用方法 についてあれこれ試みました。環境条件は母屋の南で 周年日が当たる場所です。



夏 H25.7.20



冬 H26.12.5

夏はブーゲンビレア・ランタナ・ゲンペイカズラなどを使用しましたが、ブーゲンビレアは高温の時期に有効でした。4~6月が季咲きで、以降は短日処理により秋まで使用し、さらに秋咲きのものは冬の窓辺に使用しました。また、夏の屋外で使用する観葉の種類として、シマトネリコ・ドドナエア・メラレウカ・カポック・ベンジャミン・アラレアなどは仕立ての方法

を改善することにより、有効活用できると思われました。

冬の花材としては11月から翌春4月まで開花するジャノメエリカが適材でした。ギョリュウバイも花期は $4\sim5$ 月となりますが主要花材です。

# 玄関飾花

季節や行事(正月の門松・桃の節句・端午の節句) の事例です。



夏 H24.6.22



冬 H26.12.24

初夏はアジサイ類を主に使用しています。アジサイは種類により多様な枝・葉・花の変化があり、装飾素材として多用な景観が構成できるものだと思います。 それぞれ種類の特徴を活かす面白さがあります。盛夏には熱帯花木を主とし、ベンジャミン・ガジュマルなど観葉植物を使用しましたが、アオキの使用も有効でした。

冬の玄関先は寒風多日照ですが、ジャノメエリカは 厳寒期に少々寒害を受けつつも十分観賞できます。こ の場所の花材としてウメ・オタフクナンテン・ハボタ ン・シロタエギク、2月中旬からはサンシュユ・ユキ ヤナギ・レンギョウなどの促成花木を使用しています。 正月の門松について、背後に門松を中心にしたコンテナを置いてみました。門松は多様な種類をみますが、ここに一例をあげました。このように玄関先には象徴的な装飾もよいかと思われます。

# おわりに

取り上げたコーナーの課題が多岐にわたり、いささかまとめのつかない記述になりました。造園と園芸の挟間を感じながら、それは少々課題が大きすぎますが、健康のためにと思いながら作っています。参考にしていただけるところがありましたら幸甚です。

# 「平成27年度花葉会海外ツアー カザフスタン」に参加して

# 髙 野 恵 子

平成27年5月29日から6月6日まで、カザフスタンへの植物観察ツアーに参加した。カザフスタンは、中国、インドに次ぐアジアでも3番目に広い国土を持つ内陸国で、中国北西部からカスピ海まで広がり、北側はロシアに、南側はキルギスタンやウズベキスタン、トルクメニスタンに接している。国土の多くは乾いたステップ(温帯草原)と砂漠で、地方は農牧畜がおもな産業であるものの、豊富な天然資源があり、GDPも高く、政情も安定しているということである。カザフスタンは、リンゴの原産地で目的地のアルマティーは、「リンゴの故郷」という意味だそうだ。通貨はティンゲ、ツアー時点で1ドル=135ティンゲ位だった。

# 5月29日(金)

成田空港には10時30分集合で結団式が行われた。添 乗員の青木さんを含め総勢21名。鈴木団長の挨拶の後、 アシアナ航空で13時30分に空港を出発し、仁川国際空 港で乗り換えてアマルティーには、21時40分(現地時 間) に到着した。空港では、ガイドのジャドラさんと いう女性が待っており、ホテルまでの30分の道のりの うちにカザフスタンやアルマティーについて説明して くれた。人口1,600万人のカザフスタンは、イスラム教 国にいくつかあるスタン (の国) を国名にもつものの、 100 以上の民族に分かれていることから宗教も人種も 多様でイスラム色は強くないそうだ。現在の首都は北 のアスタナに移転しているが、旧首都のアルマティー (海抜648m) は人口150万人で今も同国最大の都市で ある。空港からホテルまでの町並みは大木が茂る中に ビルが見え隠れしている。父や祖父のソビエト連邦時 代に木を植えて育てると減税されるという制度があり、 それが緑豊かな都市を生み出したそうだ。

### 5月30日(土)

天気はよく、朝8時に2台の四駆のマイクロバスに 分乗してホテルを出発し、アルマティーの南方30キロ 程のビッグアルマティー湖(標高2,500m)方面に向かっ た。この日から、ジャドラさんのほかに74歳の同国で 有名な植物学者のDr. Anna(アンナ先生)と助手の女性が加わった。

湖の上の到着地は、中国から続く天山山脈の中腹で、 山脈を越えるとキルギスタンに至るという場所で国境 はすぐ先にあり、軍が管理しているゲートがあった。 その先は、現在キルギスタンともめているということ で入れてもらえず、アンナ先生とジャドラさんが交渉 している間、周囲の傾斜地の草原を観察した。紫や白、 黄色のビオラ、アリウムや黄色のチューリップ (Tulipa heterophylla) 、黄色のポピーや、白紫の オキナグサなどが咲いており、みんな大喜びで写真を 撮っていたが、軍との交渉が決裂し、銃を持ち大きな シェパードを連れて軍人が集まり始めたので、仕方な くそこを去ることにした。次に、ビッグアルマティー 湖に戻り、周辺では、白いクレマチスや紫色のポリガ ラ、たくさんの白いアネモネが見られた。その後、開 けた場所で昼食をとり、下りながら所々で車を止めて 観察を行った。黄色のチューリップ、ビオラの群生、 サクラソウモドキなどいろいろな草花を夢中になって 撮影していると、アンナ先生から大きな針葉樹(トウ ヒ)には5~6月はダニがいるので、下にいかないよ うにと注意を受けた。刺されると高熱が出るというの で、日本でも問題になっているマダニのようなものか と思った。

途中の川沿いでは、多くの人たちがあちこちでキャンプをしていた。休日には山に出かけ、家族で時間を 過ごすことがアルマティー市民の楽しみだという。

#### 5月31日(日)

朝6時に荷物を出して、朝食後にチェックアウト。アンナ先生の勧めで当初の予定を変更し、植生の異なるという標高1,800mのアルマタウ(タウは山の意)へ7時30分に出発した。途中、白い花のヤブサンザシや野生のリンゴの大木がたくさん見られ、白樺の林に沿って走るなど、前日の植生とは大きく違っていた。しかし、朝から雨模様で、現地に着くころには霧雨になってしまい、皆、雨具をかぶり、森の合間に広がる

草原を濡れながら散策した。アンナ先生から、「小川の対岸の急斜面にはシャクヤクがあるはず。」と言われ、皆で探したところ赤い花が点在しているのが見えた。そのころには雨も上がっており、皆、斜面の対岸に渡り、数十株の赤いシャクヤク、アイリスや黄色や白のバラなどの花を撮影した。その場所でサンドイッチの昼食をとり、長岡さんたちが前夜に街で購入してきたアンズとサクランボもいただいた。



野生のリンゴ

午後は、再び下りながら観察会を行った。ピンクのチドリソウやスィートピー、アリウム等の花が見られたが、途中、足をねんざした人と傾斜地を降りる際に足を滑らせて骨折した人が出たことから急ぎアルマティーに戻り、2人は病院に行った。治療後、大事をとって骨折した人はジャバグリ村に行かずに市内に残ることになった。

レストランで夕食後、寝台列車で18時頃にほぼ時間 通りにジャバグリに向けて出発した。当初4人で2段 ベッドのコンパートメントの予定だったが、2人で一 室に替えてもらえたので広々と休むことができた。一 応、枕も毛布も備え付けられており、サービスでイン スタントのコーヒー・紅茶、歯磨きセットが付いてい て、お湯も、通路の一部に備え付けられていた。出発して少しして、車内販売が食べ物、ビールやウオッカを売りに来たので、バナナとピロシキを買った。まだ明るいし、ドアを閉めたまま話しているといきなり警察がドアを開けて何も言わずにジロリと見て通り過ぎた。後で聞くと、車内で飲酒すると罰金を取られるとジャドラさんに聞いていた組は、警察が通り過ぎてからドアをロックして楽しんだが、聞いていなくてドアを開けたままお酒を飲み始めた組は、警察が来て罰金5千ティンゲを請求され、ジャドラさんが「この団体は日本を代表する植物調査団であり、初めてのことでもあるので友好のためにも目こぼししてください。」とお願いして許してもらったそうだ。

列車は、夕暮れから日が沈んでいく中、草原を西に ひた走った。所々で、民家の明かりがポツン、ポツン 見え、月明かりにラクダの親子の影や向こうの草原に 馬の親子の群れがうかぶ幻想的な風景にずっと見とれ ていた。

#### 6月1日(月)

朝5時頃から明るくなり始め、線路沿いの平原を見ると真っ白い宿根スターチスに似た花(Crambe orientalis:ハタザオの仲間)が一面に咲いており、黄色や紫の花も見えて、お花畑のようなところを走っていた。左手方向には、雪の天山山脈が見えていた。



天山山脈とクランベ

列車は、7時にチュルクバス駅に到着し、そこから迎えのバスでジャバグリ村の民宿に8時過ぎに着いた。9時に簡単な朝食、10時に2台の車でアクシュ・ジャバグリ自然保護区の北方、天山山脈の一部であるカラタウ(黒い山の意、一番高い所で2,400m)近郊のサヤス丘陵に向かった。到着は12時過ぎ、お弁当を食べて沢沿いに山に入った。アンナ先生の話では、ジャバグリにある1,800種類のうちの180種は固有種で、この

エリアは夏には雪がなくて乾燥しているけれど、春3月ごろには原種のチューリップなどが咲き、山一面を赤や黄色に染めるということだ。登り口には、Rosapersica(黄色い花が咲くバラの原種だそうだ)と4~5種類もの野生の麦、登っていくと種のついたチューリップやアイリス、フリチラリアの残骸がたくさん見られた。

16時ごろ帰りの途につき、途中近くの湖2か所に寄った。周囲は乾燥しており、植相は貧相だったが、水辺の近くには、ダイアンサスやタヌキマメなどがぼつぼつ見られた。帰りの草原では背の低いピンクの花がかたまって見られ、近づいてみると驚くほど鋭いとげがびっしり枝に着いた Acanthophyllum pungens という木本だった。

夕食は、豆やジャガイモの入った野菜スープに焼き 魚、ハーブのディルをかけたキュウリ、パン等だった。 味付けがあまり合わず、青木さんやそのほかの人の持っ てきた醤油やドレッシングをかけたりしていただいた。

#### 6月2日 (火)

7時に朝食、8時に出発して西天山山脈のキシカンディー山(標高2,500m)方面に向かい、15分ほどで登り口に着いた。この日は、村からレインジャー2名が同行し、自然保護区で許可のない車は奥まで進めないということだったが、ジープ1台は山岳地まで入れることになり、足の弱い6~7人はそれに乗って登って行った。

この地域は雨が多いようで麓には森や沢があり、しばらく歩くと森を抜けて草原が広がった。花の種類はきわめて多く、登るにつれてブルーや2種類のピンクのアリウム(濃いピンクは西のエンデミック)、黄色いアイリス、イキシア、オレンジ色のアドニス、真っ赤な種を付けたルバーブの株などいろいろな植物が見られた。草原に入ると、3種類のウイキョウのような植物が現れ、葉の細いのは Ferula tenuisecta (固有種)とのことだった。写真を撮りながら2時間ほど歩いたが、雪をかぶった頂上までは行けずに中間地点の滝の見える場所で引き返した。滝の岩場には、アイベックスの親子が住んでいてレインジャーが場所を教えてくれた。

民宿には、16時ごろに戻った。夕食は、肉か魚で似たような献立だったが、このころからぼつぼつおなかをこわす人が現れ、私を含めた数人は青木さんに抗生物質をもらい1日食事は禁止となった。大体1日で直ったけれど、生野菜などサラダで出てくるものに問題が

あったのかもしれない。

夕食後、アンナ先生の知り合いだというカザフ人の お宅訪問があった。カザフ人は人を招くことが大好き だそうで、民族衣装で正装した大家族が迎えてくれた。 大部屋にたくさんの揚げパン、焼いたパン、お菓子や ナッツなどを用意して、お母さんがカザフのお茶をふ るまってくれた。また、人に慣れさせることを兼ねる ということで子供にいろいろな民族音楽や詩の朗読、 踊りをさせて見せてくれた。私たちもお返しに「花」 などの日本の歌を歌ったりして楽しく過ごした。



カザフのお宅で

# 6月3日 (水)

朝8時に出発して、東方面のボラチ・アシュ峠を経由してアクシュ溪谷(標高1,800m)方面に向かった。途中、なだらかな平原の地域に一面の真っ赤なケシの群落があり、麓でみられるパパベルではなく、種子のさやが長いロエメリア(Roemeria refracta)という種類だった。アクシュ溪谷近くまで行くと2台のマイクロバスは入ることができず、そのあたりを散策しても植物相は貧弱で面白くない。そこでレインジャーが用意したジープはその先に入る許可を持っていることから、2班に分かれて順に道路の終点まで行って探索することになった。短い時間だったが、終点から傾斜地の草原を上がると、まだ咲いている真っ赤な Tulipa greigii や、そこだけにあるという Iris の花も数株見ることができて大満足だった。

#### 6月4日(木)

朝7時30分に民宿を出て、シムケント空港9時45分発の国内線でアルマティーに戻った。市内で昼食後、国立博物館に行った後、一般市民のマーケットを視察した。国立博物館では、昔の人々のパオでの生活の状況や衣装などを見ることができた。マーケットでは、食肉や野菜、ドライフルーツ、洋服などあらゆる生活



チューリップの花を見られた

用品が売られていて入り口には両替所もあった。ここではドライフルーツを土産に買った。

その後、18時ころから市内のレストランでお別れの 晩さん会が開かれた。この席で鈴木団長から、長岡さ んに団長を引き継ぎ田中桃三さんらがアシストすると 挨拶があった。乾杯の後は、民族楽器のドンブラの演 奏を聴きながらの食事になった。ガイドのジャドラさ んは民族衣装に着替えてきており、ドンブラの説明を して自らも口琴(名前はシャンコブズ。口に含み、1 本の板バネを手で引いて音を出す楽器)の演奏やカザ フに伝わる詩を謳ってくれた。食事は羊と馬の肉料理 が中心で、カザフ人は冬になると一家族が1頭の馬を つぶし、冬の間それを食べ続けるという。馬乳酒や馬 乳、ラクダ乳も出たけれど、青木さんからはおなかを 壊すから自己責任で飲むようにとのこと。馬乳は酸っ ぱみのあるヨーグルトのような味で、いずれも美味し いとは思えなかった。

#### 6月5日(金)

朝6時起床、8時出発。アンナ先生の提案で予定を変更して、南のカスケーレン(標高1,800m)方面に出かけた。川沿いに上がって行き、1時間半ほど行ったところで引き返したが、それまでの場所と植相は異なり、結構たくさんの花を見ることができた。終点で

薄いブルーのアマの群落やティムスの花等を見て、下りながら観察を行った。道路沿いの山の斜面では、黄色いバラや赤いシャクヤクがあったが、2日目に見たシャクヤクより葉が広く、2週間ほど早く咲いている様子だった。

市内には14時頃戻り、メガマートで1時間ほど買い物をした後に民族楽器博物館を訪問した。ここは、自国の楽器だけではなくて世界の古い民族楽器まで集めて展示してあり、二弦のドンブラやシャンコブズの演奏なども聞くことができて豊かに楽しむことができた。その後、18時に市内のレストランで食事をとり、20時には空港に到着した。アマルティーからの出発は23時15分だった。

#### 6月6日(土)

仁川空港で乗り換え、成田には午後12時につき流れ 解散となった。

今回も、たくさんの植物を見ることができて有意義なツアーとなりました。鈴木団長さん、長い間、ありがとうございました。そして、これからも楽しい花葉会の海外ツアーが続きますように新しい役員さんお世話になります。

## 小田善一郎さんを追悼して

## 「ご苦労さん、ここにお座りよ」

私が小田先輩に初めてお会いしたのは、三好靱男ミョシ社長の呼び掛けで活動が停滞していた「花葉会」を再生させるにはと、多くの大先輩たちも加わり、岩井さん、魚躬さん、和田さん、小田さん等が中心となっての話し合いの席でした。東京近郊の研究機関からもと、研究用の種苗をお世話頂いていた岩井・魚躬の両先輩からのお誘いがありましたもので、気軽に参加して、その場の雰囲気にたじろいでいた私に、「ご苦労さん、そう硬くならずに、ここに来てお座りよ」と声を掛けてくださったのが小田先輩で、ホッとしてお隣に座らせていただきました。

### 東京パレスホテルでの活動再開

話し合いを重ねるうちに、当時の花卉主任教授であった小杉清先生を柱に、東京パレスホテルで集会を開くようになりました。会場の選定など不得意な私達にとって、東京パレスホテルは夢のような会場でしたが、小田さんが当ホテルの園芸嘱託をされていたつてで、盛大に開くことができ、回を重ね、花卉研究室に事務局が置かれ、会則が作られ、今日の「花葉会」ができた陰の功績と私は感謝しております。

### SANDER'S COMPLETE LIST OF ORCHID HYBRIDS

私の赴任したところは埼玉県農業試験場越谷支場で、場長の三木康之丞さんは自宅で蘭栽培を行い、埼玉オーキッド会を設立した方でしたから、蘭の生産技術の問題解決のための試験に関心が深く、当時は無菌培養の手法の開発も、ユリやチューリップの促成栽培技術の確立とともに課題として与えられ、先の集会の折などに小田さんから多くの情報をいただき、多少、蘭界の方々とのお付き合いもできました。試験研究分野からの委員として洋蘭の種苗特性調査を担当した折には、陰の立場から種々ご指導いただき、私の手元に表記のリスト四冊と、Helmut 氏ほか2名の『The Manual of Cultivated Orchid Species』、Tom & Marion Sheehanの『An Illustrated Survey of Orchid Genera』などの文献もご手配いただいたおかげで、その仕事は無事終わらせることができました。

#### 柳井 (山口県柳井市) の花産地振興

いろいろとお世話になる中で、柳井の温室をと、お 誘いいただきながら、仕事に追われ伺えずにおりまし たが、経済産業省の電源地域産業育成支援事業である 「柳井市花の産地振興ビジョン」作成委員会の委員に 指名され、縁深き柳井の現地調査に仕事として訪れる 機会を得て、小田さんもそれに合わせて柳井に来られ、 ご案内いただけるチャンスを得ましたことは、目に見 えない糸をしみじみと感じさせられました。

柳井の花は、単に農業として生産するのではなく、まち全体を「花のまち」に構成する3要件として、美しい花を生産するまち、美しい花が咲きこぼれるまち、美しく花をあしらうまち、としています。そうして各地区の主要農作物とあわせた花の生産と景観づくりを企画しています。委員としてはお会いしませんでしたが、いろいろとアドバイスをされておられたのではと推測されました。

### 柳井のラン温室と「むろやの園」

委員会終了後、特望の小田さんの柳井にある温室を 案内していただきました。カトレアを主体にされた温 室は、美しく整然としたもので、多くの花が咲き誇っ ており、貴重な多くの品種を解説していただきながら 拝見し、その後、市内の「むろやの園」へ。そこは小 田さんの先代が東京へ移られるまでのご実家で、元禄 元年にご先祖が商いを始められたところでした。



小田氏近影(ご遺族ご提供)

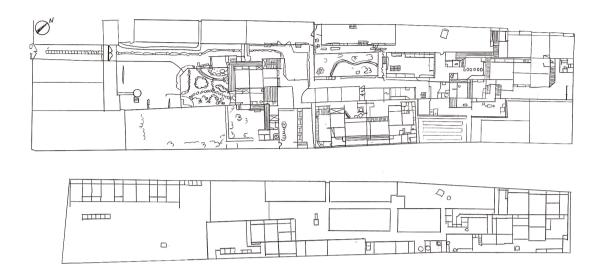
むろやは油商をされておられた時の屋号「室屋」からで、南北119m、2,561㎡の敷地には11棟35室の江戸中期の屋敷構えがそっくり残されたもので、我が国に現存する町屋のなかでは最大のものといわれています。

この建物に小田家で 使われていた生活用具 1,553点、文書1,011点 を展示し、商家博物館 として、自ら公益財団 法人 小田家博物館理

事長を務められ、蘭生産に加えこの分野にも力を注が れました。建物と展示品のすべては山口県の有形民俗 文化財に指定されています。

そっと人の脇に立ち、手を差し伸べて人を立たせる 小田さんのご厚意に感謝し、ご冥福を祈りつつ筆を置 きましょう。

村井 千里 拝 (昭和32年卒)



上段: むろやの園 概略 下段: 小田家 古図 概略

## 「鉢物新時代へ」 ~生 産 者 か ら 変 わ ろ う~

### 東京都 農業振興事務所 西多摩農業改良普及センター

上原恵美

今回の花葉会セミナーは、西千葉キャンパスのけや き会館から、流通の拠点である東京都中央卸売市場 大田市場に場所を移しての開催となりました。

近年の生産・出荷量が減少傾向の鉢物に焦点を当てたテーマとし、1日目は青果物の生産流通をビジネスモデルの参考にしながら、講演会と討論会を開催しました。2日目には新たな試みとして、産地見学会を開催しました。

7月18日 (土) オープニング挨拶 花葉会会長 千葉大学大学院園芸学研究科

教授 三吉 一光

多忙な中、遠方からご参加いただいた出席者へのおれを述べるとともに、今年4月1日に「一般社団法人花葉会」として新たにスタートしたことを報告、今回のセミナー開催、テーマの選択の趣旨が説明されました。



三吉 一光会長の挨拶

## 持続可能な農業経営を目指して

- (株) マルタ代表取締役社長
- (有)ピュアフーズとうや代表取締役 佐伯 昌彦

北海道で農業に取り組まれている講師は、"変化に

どう対応するか"についてお話しされました。 '変化 に敏感に対応できる'ことが生き残っていけるのでは ないかと講師は講演を始められました。

青果物流通業界の現状は、青果: (中食+外食) = 4:6になってきています。これは、少子高齢化や単身者割合が増加(「個食化」)が起因しており、社会が「(家庭で料理を)作らない化」が起きていることが要因となっているそうです。その対応として、スーパーマーケットの売り場は、時短・簡便化を目的にした「カット野菜」「レンジアップ」「半調理」品の売り場が拡大しています。同じ品目や素材の売り方が、サラダや手軽な食べ方ができる品目へ変化したり、さらにサラダ需要に対応して、新品種の提案(ベビー化、ミニ化、カラフル化、高糖度化)が進行してきているのです。このような売り方の変化に対応して、店ではアウトパック(事前の包装)やプリパッケージ(商品化)が図られてきており、素材である青果物が「食品」へ近づいていっていると講師は分析されていました。

さらに、青果物業界は、単純に生産された素材を流通させるだけでは十分な事業展開が見込めず、野菜の選別→袋詰め→カット→半調理→コールドチェーンの一連の仕組みを作った業者(産地)が生き残る事例が増えてきているとのことです。最初から一連の仕組みを持つのではなく、協同(事業提携など)の形で寡占化してきています。つまり、川下と川上が接近していく中での農産物のグロッサリー化(生鮮食品の製品完成度を上げ店舗へ納品すること)が進んでいるのです。このように'仕組みを変えること'にビジネスチャンスが生まれると述べられていました。

人口減少社会についても触れられ、日本の品質が高い果物は海外への輸出もしていく必要があると述べられていました。一方で、国内需要についても、日本を訪れる外国人観光客のインバウンド消費は確実な需要となっており、どのような消費行動をとっているのか注視していく必要があります。

次に実際的な(株)マルタの販売事例をあげ、ネッ

ト販売が急増していることを述べられました。マーケットに支持されるためには、販売環境の変化に合わせた販売チャネルの変更や、マーケットインの視点で商品開発が必要で提案していくことが重要であり、新しいマーケットを創り出していくことが変化に対応することになると、述べられていました。

このような青果物業界の流行を踏まえて、講師はコントラクト事業として、一貫して機械化を図り、一元管理をすることでブランド化することや、人手不足に対して必要な時期だけの雇用ができる仕組みづくり、法人同士の労働力連携もできればと考えられているようです。

最後に講師は、「マーケットイン視点での価格競争では生き残れず、『価値』の競争が始まっているので、新しい価値の提案やマーケットを創ることが必要です。構造変化にどう対応するかではなく、変化をどう作っていくかが重要であり、能動的なチャレンジが必要です。一人ではできることが限られるので、良いパートナーを選び、協同・連携ができるような仕組みを作ることが大切です」と述べられました。 "強いものが生き残るのではなく、対応したものが生き残る。外部からの挑戦に応戦しきれなかったものが滅びる。"と講演を締めくくられ、環境変化に対し自身を変化させ挑戦し続けることの重要性を知ることのできる講演でした。



佐伯氏の講演

「激動時代を生かす農業戦略」 (有) 木之内農園代表取締役会長 NPO法人阿蘇エコファーマーズセンター理事長 木之内 均

ユニークな人生遍歴をお持ちの講師より、自身の生い立ちや経験から今後の農業の未来像について、辛辣ですが的を得たお話しを伺うことができました。

講師は、教師ばかりの家庭にもかかわらず、小学校

時代から「農業をやりたい」と考えている変わった少年で、高校生時代に担任の先生の薦めで九州の(現在の)東海大学農学部を紹介され、入学しました。大学3年生の時ブラジルへ留学し、外国から日本を見るとバブル期で社会が浮かれており、食を安定させることを考えない日本が砂上の楼閣のように思えたそうです。ブラジル移住者の厳しかった時代を思えば、農業をやることをあきらめかけていた自分が恥ずかしいと思い、お金も何もないところから熊本県阿蘇で農業を始められました。

(有) 木之内農園はイチゴの観光農園が経営の中心ですが、農産加工部としてイチゴのクズ果を利用したジャムやケーキを作ったり、もち米を使って餅として販売しています。餅はもち米よりも水分を含むため、同じ1俵でも価格は高くなり利益を生みます。講師は、「農家は頭の固い経営をしないように」とお話しをされました。

一方で、(株) 花の海も経営され、現在は相談役になっています。この農場は、法人間連携で行われており、山口県の干拓地で、ミニバラ、接ぎ木苗生産、イチゴ生産、ブルーベリー生産をしています。これからは企業が農業に参入する時代が来るので、それに向けた対応と、新規就農を目指す若い人向けに農業をする場所を創るために事業をされているそうです。

さらに講師は、NPO法人阿蘇エコファーマーズセンターを開設し、農業を始めたい人に対して、新しい経営感覚を持った農業者を人材育成する機関を設立されました。全国に36軒の研修農家があり、研修後には、海外研修に行くプログラムを持っています。全国に研修先があるのは、適地適作にはかなわないことが理由です。このように農家同士が手を取り合って協力すれば大きな仕事ができるのです。農家は補助金行政のせいか、市町村、JAなどに縛られがちで、頭の固いエリア(地域)根性に取りつかれがちです。しかし、事業者にとってどこで経営しようが問題ではないのです。頭の固い農家のエリア(地域)根性を捨てて考える必要があると講師は述べられました。

次に、現在の農業人口構成比率データから、60歳以上の農業人口が73%を占め、40歳以下の人口は 6.8% しかいない現状を示されました。この構成を見るとあと10年すれば農業者がいなくなるので、役人は危機感を感じます。しかし、別の見方をすれば、あと10年すれば農業者の競争相手がいなくなるということを示しています。このように、見方を変えればチャンスにもなるのです。農家は次の戦略を考えるのが仕事です。

農家の生産部会は、何かうまくいかないと、天候が悪い、JAが悪い、普及員が悪いと言って納得しがちのように見受けられますが、最終責任は自分にあり、やらない自分が一番悪い、と講師は厳しく述べられました。また、30年前には新規就農者向けの窓口はどこにもなかったのに、現在は各市町村に窓口があり、就農給付金が最長7年、毎年150万円が支給される時代となっています。しかし、いったい何人が農業に定着するのか。自身の経験からも新規参入者が安定して農業に定着するには、一代かかると、厳しい現状についてお話しされました。

これからの農業は企業参入する時代が来ると述べられました。現在の企業参入事例のほとんどが赤字経営ですが、企業が利益が出ると見込めばすぐに参入してくると推測されています。企業は、資金力、財務力などの面で優れており、農家が優れている面は、栽培技術や忍耐力ですが、企業と連携を取って、対等に付き合うことが必要になってくるだろうと述べられました。経営は規模ではなく、大切なのは、利益が出るようにすることと、継続する方法であり、大きい規模の経営体と小さい規模の経営体がどう連携するかが重要である。新しい時代の農業は、「連携」することが重要であると重ねて述べられました。

最後に、「激動時代だが、"農"の価値とは、農産物生産を核として、6次産業化を進めさらに『生命総合産業』として、創造、確立することを目指すことである。農業を自信と誇りを持てる産業として、活用していくことが大切である」と語られました。

この講演では、耳の痛い現実を拝聴しましたが、農業は生命総合産業として、まだまだ希望と可能性のある産業であると勇気と期待を持てる講演となりました。



木ノ内氏の講演

## 討論会「花き産業の未来像を描く」 <sub>司会進行</sub>

## 花葉会理事長・FAJ取締役 長岡 求 (有)サカタテクノサービス 久保田 芳久

今回は、講師の講演をもとに、青果物流通業界での 取り組み事例を踏まえて花き業界で学ぶべきことは何 かについて、再度、講師にご登壇いただき、花葉会理 事長の長岡、幹部会員の久保田と討論会形式で導き出 すことを目的に開催されました。

まず、午前中の講演に対し、来場者からの質問に各 講師からお答えいただきました。

佐伯講師には、小売の寡占化についてや販売先と新しい売り方について質問がされました。佐伯講師からは、この10年は価格訴求が強かったが、消費者に良質なものを求める要求はあり、供給サイドが減少すれば需要が増加し、生き残りにつながる。花き業界も同様で、価格訴求だけでなく、他の価値訴求も求めていく必要がある。マーケットの大きさが変わったのではなく、消費者のお金の使い方が変わってきているので、潜在的なニーズに応えて必要がある。花でコンシェルジュのような企画ができれば、鮮度や希少性などの面だけでなく別の面での勝負できるのではないかとご提案いただきました。

一方、木之内講師には、講師が展開される3つの経営についてと優秀な生産者を増やす方法について質問がありました。木之内講師は、子供のころから農業にあこがれが強く、今のカタチがおかしいと思ったら変えていき、自分から問題に立ち向かうのが好きな性格が現在の事業へつながったと語られました。また、お金をかけて資格を取得して職業につく時代なのに、就農準備金まで与えてもなり手がない"農業"という職業は特殊な職業である。優秀な人材に就農してもらうには、農業の全体の底上げを図るか、トップ農家が名実ともに大企業並みになるしかない。農業が好きな人が農業をできない現実が国を支えているのが問題であると、お話しされました。

また、講師のお二人に共通して、企業の農業参入について質問が出ました。佐伯講師は、栽培などの経験値のマニュアル化ができていれば企業参入はあるだろうと言われました。経験値のマニュアルがあれば、施設園芸など生育コントロールができる作物は作れるからです。木之内講師も、企業は損益分岐点を超えるとわかればすぐにでも参入してくるだろうと言われました。回転が速く、味も大きく変わらない葉物やベビーリーフなどは、栽培管理が比較的楽なので、企業は参

入しやすいのではないか。逆に花は見た目が良くなければならないことや果実は味が大きく関係するので、 参入は難しいかもしれないとのことでした。



会場の様子

長岡理事長が、統計資料から切り花と鉢花の生産・販売の現状と家族構成の変化について説明を行いました。東京の住環境では家具が売れなくなっており、家具の上に花を飾れないし、夫婦共働きで人が家にいないので、鉢花の手入れもできない現状になっています。これに対し会場からは、人が家にいないのであれば、人がいるところに花や植物を売っていけばよいのではないかなどの声が上げられました。

さらに高齢化している現状や専業農家が減っている 現状についてスライドで説明すると、木之内講師から は人手不足がこれからの問題となるので、真剣に考え ていく必要があることを述べられました。佐伯講師は、 日本が行っている海外の研修生制度は奴隷制度に近い。 国内の定職につかない若者を人手不足の現場で採用す ることができれば、など提案されました。

会場からは機能性を持った植物の販売や有名人がマメ知識をつけて販売してはどうかなどの意見が出され、 佐伯講師は魚屋が旬や調理法など店先で説明しているように、花屋も消費者に向けて働きかけが必要であると述べられました。

最後に長岡理事長からの、(株)マルタのような組織は花卉業界でもできるかとの問いかけに、佐伯講師は、花業界もあるべきで、今後は、鉢物の機能性などを結び付けていくとよいのではないかと提案されました。木之内講師は個人でやることには限界があり、連携していくことが大切。地域業態ごとの枠にとらわれない連携をどう創ればよいのかを考えてもらいたいと提言され、討論会を終わりました。

お二人の講師の講演は、鋭い視点からのお話しだったので、来場者も参考になる部分が多かったようでし

た。また、青果物流通業界の現状やデータによる社会 環境の変化を踏まえての討論会は、参考になる情報を 得ることができました。

## 7月19日(日) シクラメン生産農家見学



集合写真

東武線館林駅に朝 10:00に集合して、昨年花葉会サマーセミナーに登壇していただいた群馬県邑楽郡館林シクラメン生産農家の見学会を行いました。訪問した生産農家は、有限会社峯崎園芸、石川花園、誠養園の3農園です。

今回は、実際に生産現場を見学し、若いシクラメン 生産者がお互いの技術を磨きながら、どのようにして 品質向上に向けて努力してきたのかを学ぶために、現 地見学会という初の試みを行いました。

車中では、誠養園 野本寿久氏が、見学農家の紹介を行いました。それぞれ栽培方法は異なるが仲間意識を持ち、技術や情報交換をして、栄養診断方法、細霧冷房、ヒートポンプなどの導入などによって、品質向上に結びつけた経緯についてお話しがありました。

現地へ到着すると、大変暑い中にも関わらず(当日は午前10時の時点で34℃でした)、熱心に説明してくださいました。また、3軒ともそれぞれ栽培方針が異なり、興味深かったです。

3軒の栽培概況を比較すると、次ページのようにま とめられました。

移動中の車中では、参加者は熱心に見学先の栽培管理方法について話合い、見学中は生産農家へ質問が矢継ぎ早に出て、充実した現地検討会となりました。参加者の中には、2日目だけ参加された方が数名いらっしゃいました。実際に現地で栽培している状況を見な

がら、栽培者との質疑応答を通しての技術と情報交換は、互いに得るものがあったと思います。また、当日は3農園のみの見学でしたが、仲間と協働して取り組むことで、(それぞれ栽培方針は異なるが)自分なりの技術導入や比較を行い、効率的に品質の向上に結び付いていることが、優良事例になったと思われました。







## 訪問した農家3軒の栽培概況

	1		
	(有) 峯崎園芸 峯崎 宏之氏	誠養園 野本 寿久氏	石川花園 石川 英司氏
施設環境	鉄骨ガラスハウス	鉄骨ガラスハウス、 硬質フィルムハウス	鉄骨ハウス
全体的な草姿の 状態と栽培方針	やや株が伸長している感じに作っているが、今後は葉 組み作業などを通して草姿を整えていく	締まった株でこじんまりし た感じに作る	わい化剤を使用して、株を 伸長させない栽培。コンパ クトにまとまった株づくり
灌水方法	生育初期から底面マット吸水	幼苗時は手灌水、仕上げ鉢へ 鉢上げ後は底面マット吸水	手灌水
栄養診断	花芽分化時は測定値を低く 管理	花芽分化時は測定値を低く 管理	花芽分化時は測定値をやや 高めに管理
ヒートポンプ	暖房の補助的利用	夜冷に利用(19~20°C設定)	夜冷に利用 除湿としても活用
細霧冷房	稼働中	稼働中	未導入 (ただし、葉水をハスロで 散水する)
遮光ネット	遮光率50%程度の遮光ネット を展帳。ハウス内を20,000~ 30,0001xになるようにする	遮光率50%程度の遮光ネット を展帳。ハウス内を20,000~ 30,0001xになるようにする	遮光率75%程度の遮光ネット を展帳。暗めに管理(葉やけ 防止のため)
種子の入手方法	自家採種は一部、ほとんど 購入種子	自家採種60%、購入種子40%	F 1 系統種子を購入
その他	シクラメン以外に、 アジサイ、カーネー ションも栽培	シクラメン以外に、 リーガースベゴニア も栽培	シクラメン以外に、 カーネーション、 ランタナも栽培

## 松戸花卉研で過ごした日々とこれから

# 花卉園芸学研究室4年 徳 本 翔 子

3年生の夏休み前に配属される研究室が決まり、本稿を執筆している9月で研究室生活が始まって1年が経ちます。様々なイベントや出来事があり、私にはあっという間だったと感じられます。そんな日々を過ごした松戸の研究室を、振り返りながら紹介したいと思います。

過去の花卉園芸学研究室レポートで何度か紹介され ていますが、週2回行う共同作業が、研究の次に、研 究室での生活の中心でした。共同作業は主に圃場の整 備、ハウスの整備、キャンパス内の整備などを行いま す。整備と書きましたが、作業内容はほとんどが除草 や草刈りです。ハウスの側窓を直したり、作業棟の片 付けをしたりすることもありますが、私たちが管理し ている圃場の範囲はとても広く、そこを少人数の学生 で整備するため、除草や草刈りといった作業が多くな り、作業の8割を占めていたような気がします。夏場 の作業では、皆がまるでシャワーを浴びたかのように なるまで汗だくになります。そのようになりながらも、 きれいになった圃場やハウスを見ると、何とも言えな い達成感が得られます。毎週の共同作業は、クモが大 嫌いな私にはクモとの戦いの時間でもあります。クモ 本体、クモの巣、クモの糸のすべてが嫌いです。その どれかを見つけると「わあああ!」「ぎゃあああ!」 などと叫んでしまいます。「その叫んでいる姿を見る のは飽きた」と言われながら、先生に笑われながらも、 毎度同じリアクションでクモに怯えながら作業に参加 しています。

研究室に配属された当初、私は植物の名前をほとんど知りませんでした。自分で植物を育てたのは小学生の時のアサガオくらい、知っている花の名前はチューリップやバラなど小学生でも知っているようなものくらい…、その状態で迎えた11月の戸定祭。松戸と柏の研究室が一緒におこなう1年に1度だけのフラワーショップですが、私は楽しむ余裕はまったくなく、植物を調べ、名前を覚える事だけで精一杯でした。今では共同作業、種子採り、戸定祭、展示会などを通して植物に興味を持ち、少しずつ名前を覚えています。

先輩が研究しているフロックスの花色の多彩さに驚き、ダリアの品種の多さに驚き、ヤブガラシのしぶとさに驚き…、研究室での日々は驚きの連続です。私は登山が好きで、時間があると登山に行くのですが、研究室に所属する前は、ただ頂上を目指して登るだけで、

植物を観察してきませんでした。今では、季節の植物を見つけては時々足を止めて、写真を撮ったり、植物 図鑑を持って調べたりしながら登山をしています。

「今日はどんな花に出会えるかな」と、新たな楽しみ を見つけました。そんな自分の変化にも驚きです。

戸定祭で松戸と柏合同でおこなうフラワーショップ 以外にも、柏メンバーと共に行動することはあります が、多くはありません。花葉会セミナー、種子採り、 戸定祭、修論・卒論発表会、追いコンと、2ヶ月に1 回くらいの頻度です。研究室配属前に、松戸と柏は交 流があると聞いていましたが、想像していたより交流 の機会は少なく、たまに柏の学生が松戸に来ると嬉し くてつい呼び止めてしまいます。

本稿執筆時点で、貴重な交流の機会である戸定祭があと2ヶ月と迫っています。大学院の受験が終わり、研究室の先輩や友人の就職先が決まってきて、ホッと一息つく暇もなく準備に追われています。そんな中、私の花卉研究室紹介ムービーのおかげ(?)か、松戸と柏合わせて、今年は6人の学部3年生が新たなメンバーとして加わりました。今の松戸の研究室はとても静かなので、少し賑やかになるかと思います。今後、研究室がどのように変わるか、どんな研究がおこなわれていくかが非常に楽しみです。

気が付けば配属から1年が経ち、あと半年で卒業です。実験で思ったような結果が出なくて落ち込むこともありますが、学生同士で励まし合い、研究を進めています。時にはお酒を交えながら談笑します。残りの学生生活を楽しむとともに、1日1日を大切にし、悔いのないように過ごしたいと思います。



2015.3.31 共同作業後に桜の下で

## 多様な価値観の交わる中で

### 花卉園芸学研究室学部4年

渡 辺 史

柏の葉キャンパス駅周辺の大規模開発は、かなり落ち着いてきました。駅からキャンパスまでの道沿いには、ベンチが設置され人々が思い思いにくつろいでいる姿がみられます。そんな周囲の環境とは別に、常に変化の絶えない千葉大学柏の葉キャンパスの今をお伝えします。

## 柏の葉キャンパス花卉園芸学研究室の今

柏の葉キャンパスは、現在渡辺先生・金谷先生の両 先生を始めとした教職員、技術職員の方々に日々ご指 導いただきながら、13名の学生が研究を行っておりま す。研究内容は、地理系統学から、屋上緑化、花色や 葉色の変化の生理的機構、園芸植物の耐塩性など、他 の研究室と比べても多岐にわたっており、花卉研の大 きな特徴の一つとなっています。学生の年齢層も上は 博士後期3年から下は学部2年生までと幅広く、上級 生が下級生を指導する場面も多く見られます。また研 究だけでなく、週に一度『高度化セル成形苗生産利用 システム』を利用した花苗の実践的技術を学んでいま す。実際に販売する商品を作るという作業を通して、 多様な植物の栽培方法について学ぶと同時に、知識を 実践にどう結び付けるかを考える機会にもなっていま す。

今年の3月~4月に薬草園の改修が行われ、学生も改修の初期段階から関わりました。敷石をはがしたり、防草シートを張ったり通常では経験できない作業を行うことができました。今回の改修で、始めから終わりまで施設を作り上げる貴重な経験を得ることができました。新しい薬草園には池が設置されています。学生が何もない更地から池の原形となる穴を掘り、専門の方の手によって最終的な施工が行われました。ハスやガマなどが植えられ、メダカが悠々と泳いでいる姿を見ることができます。日常的に見慣れた植物が、菜用植物として利用できるなど新たな発見も多く、充実した期間であったと思います。現在では、診療所の患者さんが診療の合間に見て回られていたり、外部から見学の方が訪れたりと多くの人に見ていただいています。

#### 学生の日常

学生は各人がまったく異なる内容の研究を行っているため、日々の活動は個別に行っている場合が多くな

ります。しかし、学生間の話し合いは活発に行われており、自身の研究での疑問点をお互いの専門分野の知識を総動員して議論する中で、1人では考えもしなかったような発想に至ることもあります。松戸の学生とも交流は続いており、現在は、大学祭に向けて両キャンパスの学生間で協力して花苗の栽培や球根の仕入れなどを行っている最中です。キャンパスは異なれど、花卉園芸研究室としてのつながりは今も昔も変わりないものだと思います。

## 今後変化していく業界の中で

東京オリンピックなどの大きなイベントが控え、社会のニーズが常に変化している状況の中で、いかにして花の消費を増やしていくのか、従来とは異なる植物の利用法はないかということを考えることができる環境が、柏の葉キャンパスにはあると感じています。薬学の先生方、共同研究先の方とゼミや共同作業をご一緒させていただいていることから、園芸学的な視点とはまた違った多様な視点で植物と人のかかわりを知ることができ、自らの視野を広く持つことにもつながっていると感じています。

また、取引先や研究室のOG・OBなどの多様な立場の方々とお話しをさせていただく機会も多く、時に議論に混ぜていただく中で、花卉業界の今を知るとともに、今後自分たちが社会に出たとき、どんな場面でどのような役割を果たせるかを真剣に考える場を与えられていることに感謝しています。このようなチャンスを存分に生かすため、これからも日々精進していきたいと思います。今後も皆様のご支援・ご指導をよろしくお願い致します。



## 花と向き合う2年間

### 園芸別科花卉専攻2年

大 下 翔 平

私たち園芸別科花卉専攻は「花組」と呼ばれています。これからの花業界で働いていくために必要な基礎知識や、高度な栽培技術を学んでいます。今年の花組メンバーは、2年生2名に1年生6名の計8名で構成です。去年の入学者の少なさから、今年も人が少ないのでは…と心配していましたが、前年に比べて新入生の数に恵まれ、心配が杞憂に終わり内心ほっとしています。

花組では週に2回、柏の葉キャンパス内の花卉・苗 生産部で実習が行われます。母の日に合わせたカリブ ラコアの出荷、夏休みにはシクラメンの葉組、葉分け 作業にパンジー、ビオラの播種とポット上げ。冬にな るとペチュニアの挿し芽など、年間の生産スケジュー ルに合わせた実習を行っています。

花卉産業必修1000属検定用ハウスの灌水も花組の役目です。入学後、すぐに先輩や共同で管理を行っている花卉研究室の皆さんに灌水についての手ほどきを受け、覚えていきます。ハウス全体で管理の不足が無いように確かめるのは頭で思っている以上に大変です。乾きやすい鉢や、多湿を嫌う植物など1つのハウス内に異なる個性の植物が並んでいるので、1つ1つ丁寧に見極めなければなりません。また、当然ながら天気や気温、季節により管理方法が変わっていきます。慣れないうちは、とにかく鉢を乾かさないようにと多く水を与えすぎて根腐れさせてしまうことや授業の時間に追われ、乾いている鉢の確認が疎かになり、乾かし過ぎてしまうこともありました。しかし、回数を重ねていくうちに、その植物の特徴に合わせた灌水と鉢の状態確認が身に付くようになりました。

花卉産業必修1000属検定用ハウスの管理をしながら植物を観察し、特徴と名前を覚えていくのも重要なことの一つです。ハウス内の植物には一つずつ科名、属名と和名が表記されているラベルがつけられており、その名前を確認することができます。名前を覚えるのは検定試験のためです。検定試験は難しさに応じてC級、B級、A級の3つに分けられています。特にC級は、花の仕事をする際に必要最低限の知識とされ、花

組では修了までにC級の合格が目標になっています。

11月には戸定祭があります。花組では自分たちが育てた花の他に、OBの皆さんから頂いた植物の販売をしています。販売する花は花選びから価格まで自分たちで考えて決めました。先生や技官の皆さんから頂いたアドバイス、OBの皆さんからの植物の提供など、今年も多くの人たちの力を借りているこの一大イベントを成功させるべく、頑張っていきたいと思います。

戸定祭が終わると2年生は修了論文の作成が待っています。各自がテーマを決め実験に取り組んでいます。 実験が始まると、1年の時は長く感じた時間があっという間に過ぎていきます。また植物が相手ということもあり、思うように進まない実験に悪戦苦闘の毎日。 気が付くと2年目の半分が過ぎ、残りの学校生活も少なくなってきました。実習と実験。それから1000属検定試験の勉強とまだまだやることは多く、慌ただしい日々が続いていくと思います。

2年間の実習の中で自分自身が成長できたと実感できることもあります。実習の内容を聞いて何が必要なのかを自分で考え行動に移すこと、その場の作業に応じて「今自分が何をするべきなのか」、「自分にできることはないか」周りを見て行動できるようになりました。花組で得た経験は、今後の自分にとっての財産です。



## 花葉会総会

平成26年度一般社団法人花葉会総会が、平成27年10月18日(日)午後2時より、千葉大学園芸学部100周年記念戸定が丘ホールにて開催されました。出席者は22名、久保田芳久幹部会員の司会進行で定刻どおり開始されました。

三吉一光会長の開会挨拶、千葉 大学及び園芸学部の近況報告があ りました。

「大学全体についての報告が3つ ある。

①文部科学省が大学の国際化を 推進するというプログラムを全国 に呼びかけた。これに千葉大学も 応募したところ実施校に採択され た。5年間のプログラムで、昨年 から始まっており、残り4年間に 大学の国際化を推進するというも の。これにより予算付けされ、こ れまでより学生の海外渡航が進め られ、短期・中期の留学が増えて いる。

②「千葉大学院大学」という名称で呼ばれるが、10年ほど前より研究を主体にする大学は、「大学院大学」と言うということになり、この名称を名乗っている。もちろん学部の教育もあるが、大学院大学の存在は大学院を主体にしたものだとのことが定義され、今夏、文部科学省からも認められた。

③全国の国立大学の種類を3つにわけ、第1グループは、主に地方大学で教育・工学など地方の産業や仕組みを維持するのに必要な大学、第2グループは、特殊な機能を持った大学で、東京藝術大学・東京医科歯科大学など。第3グルー

プは、世界の大学と学術面で競争やリーダーシップの取れる大学。 この3つのグループのどこに属するかは、学部単位でなく大学単位で決める。千葉大学は、第3グループに申請し、このグループに属することになった。世界を相手に研究しなければならない。

財源は、国からの交付金だが、3つのグループで財源の配分が変わってくる。第1グループは、その地方の社会構造を維持するのに必要不可欠なので、確実に持続的に交付される。第3グループに関しては、成果次第で変わってくる。

これを受けて、千葉大学では大 学院の組織の見直しがされている。 理学部と工学部が合体する。文系 と理系を融合させた新しく国際教 養学部が新設される。園芸学部か らも3名の教員が移動する。

園芸学部としては、園芸産業創発学というプログラムが始動し、 平成28年度の入試より学生を募集する。来年の新入生より園芸学科・ 食料資源経済学科から10名ほどの学生にこのプログラムを試行的に始めることになった。このプログラムの主な目的は3つある。①は培ってきた技術教育、②はマーケティング、③は国際的な視野を持つ、を教育の柱とする。

これからの園芸界を担うような 人材を育成したいとの学部・学科 の思いがあるので、周囲に高校生 がいたら受験を勧めていただけた らと思う」と、しめくくられまし た。 午前中に開催された運営幹部会 で推薦された長岡求理事長が議長 に指名され、議事に入りました。

4月より花葉会が、一般社団法人となり組織が変わったことにより、議題が2014年9月1日~3月31日までの26年度前期会計報告、4月1日から8月31日までの第1期の会計及び監査報告という具合に、この1年を2つに分けて報告されました。



開会の挨拶をする三吉一光会長

### (1)平成26年度事業報告

(平成26年9月1日~平成27年8月31日)

- ①平成26年10月26日 総会
- ②花葉会賞贈呈
- ③平成26年12月10日「花葉」第33 号発行
- ④平成27年4月1日 一般社団法 人花葉会発足
- ⑤平成27年5月29日~6月6日 ガザフスタンへの海外園芸調査
- ⑥第30回 2015年花葉会セミナー⑦花産業必修1000属検定
- ⑧幹事会開催は、平成26年10月13 日、10月26日、12月20日、平成 27年1月31日、3月21日、運営 幹部会開催は、4月26日、7月 4日、8月22日

#### (2)平成26年度会計報告

4月1日より一般社団法人化され

たことにより、法人化前(平成26年9月1日~平成27年3月31日)を前期会計報告として、國分尚副会長より①一般会計報告、②第30回2015年花葉会セミナー会計報告がなされ、③平成26年度前期会計監査報告を河野幹司氏が「平成26年度の会計収支の結果、正確に整理・執行されている」と行ないました。

### 平成26年度前期会計報告

(平成26年9月1日~平成27年3月31日) ①一般会計報告

### 収入の部

前年度繰越金	456, 853
会報広告料(33号)	849, 784
協力金	564, 790
総会余剰金	4,000
基金より繰入	1, 675, 862
書籍販売	7, 370
雑収入	494
預金利息	144
合 計	3,559,297円

#### 支出の部

合 計

差引残高

印刷費	1, 102
会報関係	864, 857
通信費	77, 086
運送費	3, 920
総会費(記念品	代等) 159,118
会議費	142, 716
事務費	10, 668
賃金等	611,770
慶弔費	37, 994
税金	69, 839
日本花普及セン	ター賛助金
	100, 108
法人登記費用	285, 986
2014年サマーセ	ミナー補填
	675, 862

3,041,026円

518,271円

②第30回2015花葉会セミナー会計 報告

収入

(内訳)		
7,000円	× 70人	490,000
3,000円	× 51人	153,000
2,000円	× 29人	58,000
テキスト	、販売	6,500

707,500円

707.500円

支出	990,894円
(内訳)	
会場費	136, 640
印刷費	65, 865
講師謝礼	130, 210
講師旅費	110, 000
懇親会費	210,000
お弁当・昼食	111,830
見学会バス代	64, 800
通信費	91,626
運送費	8,002
事務費	61, 921
合 計	990, 894円
差引残高	-283, 394円

(1)(2)の議案は、拍手を持って 承認されました。

より補填

\*平成26年度後期一般会計

## (3)平成26年度後期会計および 監査報告

27年度1期(4月1日~8月31日) の5ヶ月間を田中桃三監事より、 決算報告書の詳しい説明がなされ ました。

一般社団法人化を機会に、田中 桃三氏と石川君子氏が監事就任。 会計監査だけでなく業務監査も兼 ねるようになり、代表として田中 氏が業務・会計は適切に行なわれ ていると監査報告を行ない、拍手 を持って承認されました。

### (4)平成27年度事業計画

(平成27年9月1日~平成28年8月31日)

- ①「花葉」34号発行
- ②花産業必修1000属検定
- ③第31回 2016年花葉会セミナー 開催

平成27年7月2・3日(土・日)

- ④海外園芸事情調査 (トルコ)
- ⑤総会、花葉会賞の贈呈
- ⑥交流会の開催

## (5)平成27年度一般会計予算(案) 収入の部

前年度繰越金	-234, 709
会報広告料(33号)	875, 000
協力金	100,000
基金より繰入	2,000,000
合 計	2 740 291円

### 支出の部

印刷費	60, 000
会報関係	870, 000
通信費	100, 000
運送費	10,000
総会費	200, 000
会議費	200, 000
事務費	130, 000
賃金	950, 000
慶弔費	50, 000
税金	70,000
予備費	100, 291
合 計	2,740,291円

(4) (5) の議題は、拍手を持って 承認されました。

#### 報告

田中桃三監事より、一般社団法 人花葉会発足について「昨年の夏 から社団法人化への議論が起こり、 27年3月31日付けで登記が終わり、 4月1日から法人化しました。詳 しくは「花葉」に記載しました。 法人化しましたが、会の運営は変 わりません。これまで個人名で行 なっていた部分を法人名へと整理 してゆきたい」と、報告されまし た。

鈴木司幹部会員と長岡求理事長より、「今まで"花葉"送付時に協力金という形で郵便振替用紙を封入したが、協力金は少なかった。今回、別刷りの用紙を封入し、協力金のお願いをし、事務経費だけでも賄いたいと思っている」との発言がありました。

さらに、花岡喜重氏より「基金・協力金の意義を会員の皆さんに伝えてはどうか」との意見があった。「皆様の協力のもと順調に議事が進んだことに感謝します」と、議長より挨拶があり議事が終了しました。

## 花卉産業必修1000属検定試験 B級合格認定証授与

任倩玉氏にB級の認定証が三吉 一光教授より授与されました。

#### 海外園芸事情調査報告スライド上映

午後3時より4時15分まで、平成27年5月29日~6月6日にカザフスタンへの海外園芸調査に参加した長岡求理事長が撮影した、野生植物230種ほどを植物名と現地の状況を交えながら画像にて解説した。

#### 懇親会

午後4時30分より緑風会館2階にて、國分尚副会長の司会進行で 懇親会が始まりました。

開会の挨拶を熱田健氏が行い、 渡辺重吉郎先生が「発展と健康を 祝して、カンパイ」と、乾杯の発 声をされました。終始和やかに進 行し、閉会の挨拶を鈴木邦彦氏が 行い、盛会のうちに会は終了しま した。

(文責:編集部)



B級合格者任倩玉氏



懇親会開会の挨拶をする熱田健氏



乾杯の発声をする渡辺重吉郎先生



懇親会閉会の挨拶をする鈴木邦彦氏

## 渡辺重吉郎先生の長寿を祝う会

平成27年7月3日(金)にザ・クレストホテル柏 (千葉県柏市)で「渡辺重吉郎先生の長寿を祝う会」 を開催しました。

この会は、渡辺先生が88歳になられたことをお聞き し、鈴木正之・文子夫妻、大林修一・山口まりが発起 人となり、昭和50年前後に農場研究室に集った方々を 中心に80名ほどの方にご案内をいたしました。

当日は、30名が出席。渡辺先生にひとかたならぬお 世話になった面々が、日本各地ばかりでなく中国から も先生への感謝とご長寿を祝して、駆けつけてくれま した。

大林修一氏の司会で会を進行し、発起人代表として 鈴木正之氏が挨拶、つづいて高垣 美智子教授からお 祝いの言葉、花束贈呈・記念品贈呈に続き、渡辺先生 にご挨拶をいただきました。先生は、千葉大学にかか わりを持ったいきさつや昭和20~30年代の花卉研究室 の様子などを話されました。乾杯の発声は、中国浙江 省から参加してくれた肖建成氏が行い、会食・歓談に なりました。

当時、農場研究室には、学科・学年をこえるばかりでなく、学外の方も出入りしており、卒業後は、なかなか会う機会も無いことから、この会は渡辺先生の長寿をお祝いすることが主なのですが、一部同窓会的な意味もありました。渡辺先生を囲んでの歓談はもちろんですが、数十年ぶりの再会にあちこちで話の花が咲き誇っていました。

最後に参加者全員が近況を報告し、先生の矍鑠たる 姿に元気をいただきつつ「次回は、渡辺先生の卒寿の お祝いで…」を約束して、お開きとなり、2次会・3 次会へと名残り尽きませんでした。

渡辺先生の胸には薦岡美奈子氏作成のカトレアのコサージュ。会場は、長野県の鮎沢正浩氏のカーネーションとアジサイの切り花、千葉県の鈴木正之氏よりアガパンサスの切り花、福島県の草福晃氏の鉢花で華やかに彩られました。





## 花葉会会員近況報告

通信欄端のおよりないましたが相変りず花が 関係の仕事をしております 今年の発来には浅山先生のみかり

園 昭24 林

84才、植物名、学名か"すぐ"に生て こたくなり、年を感じます。

7月にパルト三国へ行った時は、

Tilia cordata Small-leaved linden シナノキ科が、すぐ私てきて、ほっとしました。

**園 昭28 阿 武** 

花草含総会案内ありがもうございます。 残念ですか当日は新愛を重明な病しす。 此现

この無いなって(昭、30年卆)何時どうなる 事かわかりませんか「バラの耐病」トゲ無い 育種に挑戦してからうと思っています。 よい情報がありましたら粉えて下まり。

園昭30 吉池貞藏

现位于117. 发线《永族》 共にとろしております なっかしつより後り ありからごろいれた

専攻科 昭33 並 木 久 男

通信欄

いつもご案内頂き有難うございます。

平成9年に脳梗塞を患って以来、同じ障害 を持つ仲間の交流を進める組織を作り、社会 復帰のお手伝いをしております。

利き手が不自由で専らパソコンに頼り、貼 り付けで対応しております。

お陰様で頗る元気です、ご盛会を祈り、ご 参加の皆様に宜しくお伝えください。

園昭33 髙 木 文 男

相変わらず福祉施設の 花瓊落理、花博跃的公园的 管理等がランティアを続けて

園 昭34

一体調不良の多久席設け了 林脩乙芝生の石戸完正 行なフンよります。

通信欄

たっくりの思いかですからく、英国の働き書からかって だれて えゃるからわせて

## 園昭35 小泉 力

## 園昭35 藤野守弘

### 通信欄

花葉会のお知らせ有難うございました。 小生数年来目まいに悩まされ遠出が 出来なくなりました。昼間は庭を散歩 したり野菜の収穫等をしております。 今年はリコリス類が色々咲き驚いて います。夜の楽しみは晩酌とTV位 の物です。残念ながら欠席させて頂き

## 通信欄

年を重ねるかはなかの低下を成じるようになります。 こようになります。 そのたの、上歩きを17健康維持に 世のています。

## 園昭35 片山繁朗

## 総農昭36 茂 木 孝 夫

いつも「花葉」を送っていただき有難うございます。海外への発送は郵便局で特別な手続きで面倒と思いますので。さて、突然にアルゼンチンから、花葉1~10号を送ります。私も76歳になり、身辺をかたづけなければいけない時期になりまして、私の息子も日本語は話しはするけど、読むことは出来ないので、私が大事にしていた本も、将来、古紙として処分されることになると思いますので、適当な所へ届けているところです。花葉がなぜアルゼンチンに創刊号からあるかと云うと、当時JICAの花卉専門家としてアルゼンチンの園芸センターに勤務していた安藤助教授が特別にとりはからってくれたからです。花葉は小冊子ですが、内容、それに編集者の方々の努力を考えれば、万釣の重みです。大事にしてくれる方にさし上げて下さい。

花葉No. 32に植物遺伝資源をめぐる最近の状況という記事がありましたが、それにまつわるお話し。昨年(2014年)の3月~5月に、鴨川知弘さん(園昭58)がJICAのシニア・ボランティアとしてアルゼンチンに来ました。鴨川さんはサカタのタネの現役職員で3か月の短期でここの国立農事試験場(INTA)にアルゼンチン原産の植物を使った新しい花卉を作り出す共同研究に来られたそうです。また、すでに商品化されて、アメリカで良く売れているメカルドニアの利益の一部をアルゼンチンに支払ったそうです。この時点ではまだ条約は批准されていなかったのですが、実際に支払われた第一号だろうと話していました。

今度のNo. 33では悲しいニュース、同組生の海野淑子さんが亡くなった。学校ではいつも同じグループだったし、そのあとは花葉で毎回海外ツアーに参加していること、又、東日本大震災募金に彼女らしいメッセージをのせているなど元気にしているのだなと思っていたのに・・・。敬愛する鳥居恒夫さんのボタニカルスケッチさすがと思いました。彼との思い出、入学間もない頃(60年近い昔のこと)海外志望で農業関係でないと移住受入れはむずかしいということなので、とりあえず近くの園芸学部でも行っておくかと入学した千葉市の画家の息子の私は花の名前も知らない、寮に住んでいた友達から温室で「あの花、しっくりかえって咲いているだろ、だからシクラメンだ」なと教わっていると、あまりの程度の低さに鳥居君が「青木君いいこと教えて上げよう。知らない植物の名前を聞かれたら、頭にミヤマノ〜とつければ何とかなる。ミヤマノナシラズとかミヤマノシランとか」と。あれから60年、私の住んでいるところはパンパスの大平原、地平線の見えるところで、南・北・西どちらに飛んでも1000km以上いかねば山はありません。いまだにこの名案は使ったことがありません。

アルゼンチンより

## 園昭36 青木次芳

通信欄大部手を変わましたかって気でしています。

別昭36 星野次郎

通信欄

現在り人どりを11102個多十でます。 事分も早いものであるな十分はとおりました 数度が不思切数大後、浅山が数後、横半切りの 度入ですかる かいるこん古い苦しいかります。 グスリかかって見ます。とってかっかし、お、字内も いでんでもから、十分安しことが独ないので 足類しますするなるとなる人お伝んできい。

研昭36 舩 越 正 秀

通信欄できなれるないではないます。これはいてないます。またうちの見しかし、我を紹布は頂上でかさすのかけるく、からからないでのいいっちょうできばんいかかったとそれば、森や里海に思せられた、かんをもかのきちきかして、ないないではないではないではないないできないないではないではないないできないないできないとこれないまないできないことと初かのよいる。

別昭38 杉 本 武 満

12月になるとりませるからます。 今年に入り延園管理はついたいけない と思っています。この監会をネケリ ます。

総農 昭38 渡 辺 肇

通信欄

シクラメン教培50年、教培技術は格段の同にか制まが、販売価格の低下で苦慮してあります。特に手作り教店ですので、

後継者と芸に生産に視るでえるりますが、今谷も粕延していと思います。

政治には、日本人は男性が生物に 花を贈る一般ないかない為、消動が伸い にくいときかれるり、男性の変数改革の必必及

別昭39 宮沢正和

正される代でれる。 ます。

総農昭39 板 垣 修 悦

## 通信欄

京庭学園をしております。 イベトないこへ、キュー(春野年) の月コのトナ会(なっかりも) 8月にないナング(なっかりまた) は月いも登念(せいも、ネギン) は月いも多念(大根、白菜) すしましたこいます。

園昭39 大山 すみ子

### 通信欄

動が弱ると、 花も力なく成くようです。

スポーツンムにかよって、体力作りから、始めてます。

総農 昭40 杉 村 素 生

## 通信欄

私が1分年的人創設に下審山界 直洋市天神山の自然植物屋(現底 花の森、秋山かかかかっかが、地防、(黄疸) の日本百選ト認定をれれな 実生、花をと、沙ケナケの研応期以り 多くの方に夢いれていたがでいます

研昭40 古 川 仁 朗

## 通信欄

花井国芸とは最く別の道へ進みからりたなける日夕になけることは、います。でも、いき花葉会の活動に関心を持っています。

別 昭40 根 岸 好 男

#### 通信欄

現在観葉植物を栽培

別 昭49 榊 原 守

#### 通信欄

長期研修生として十事人をであってから早くものが世をといってから早くものは、世界中間を選出した。食り思い生とでは、「に役立ったとなり」というできる。

研昭51 福 山 武 夫

## 通信欄

平成29年3月31日已25日CZ 山の华庁已送年届张 いんはしな、3/多向、花まだ当として好るる 仕事をすせていれれる感料にオリチア

在職中に弱りました三厚情の対し、ルから厚く か込中し上げます

现在,山口果花生顶望也二岁一7一两日闲暇总知? 引起主動放してまります.

今後はコクェクントでうの山は米オクジナル各般の電に取り絶み人にといて祝とは何か?をずえるから 一分2の人主を楽しみないと見っています。

園昭55 石 光 照 彦

通信欄

高校受験生に理科を教えることを中心 にして、生活していまず、かっての教之子か らは、理系の各分野に進む人たちが、数 多く出ています。特に近年は、生物に関係 お分野(農学系も含む)を志、望る卒業 生が、増えファあります。まな、ごく最近の 話題といい小梨大と埼玉大の平業生が ノーベル賞も変賞なとし、千葉のおい、喜びと

> 園 昭56 伊

励みとも 感じます。

昨年(一昨年?)の横井先生 のあるりな会では、Tみかい、光学方、光生方に再会できまれん。 横村生生の砂入コレクランは 川の市に寄贈されるとききまれか

園昭60 宮 岡 美奈子

日音きな料がシステム,土壌海化関係、 の仕事を 日鉄住金環境 (枠)で や、ております。

> 研 昭60 大 石

独加区里区。

〒300-2736 茨城県常総市孫兵工新田384

TEL:0297-38-6166 FAX:0297-38-6167 園平08 秋葉伸之

一選出版7年目になりました。

これからまた寒い季せつもい

なからくかなと思いなから冬をす

博平09 立澤文見

## 花葉会の法人化について その目的と経過報告

監事田中桃三

今年4月1日付で花葉会は一般社団法人と組織変更をした。

実際にこれから法人としてどのように変わるかと言えば特に運営上の変化はない。ではなぜ法人化の必要があったかと言えば、それは現在ある基金の保有の問題であった。今までのような任意団体では花葉会名義の預金口座を持つことはできない。そこで代表者(会長、理事長)の個人預金として保有されてきた。初期には事務長の名義で預金されていたこともあった。

しかし個人名義であることは相続その他の事実が起きた時面倒なことが起きる。もちろん相続税では団体の財産であることが証明されれば課税されることはないが銀行の名義変更は厄介である。銀行にもよるが相続人全員の印鑑証明や実印の押印が求められ、会とは関係のない方々を巻き込んで日にちも手間もかかる。

実際には現在花葉会で行っている事業は特に法人であるかどうかに関係はあまりない。しかし今後、大学、役所、他の団体などと委託事業や共同事業などを行うことがあれば、法人化していることは絶対的に有利な条件となる。

つまり、花葉会が生き残り発展していくために、必要な新しい事業をするために、必要な要件のひとつとして法人化したわけである。

事業にしても事務にしても法人化しただけで改革できるわけではない。それらはあくまでも当事者のやる気の問題で、単にやりやすいように道ならしをしただけである。

法人化について具体的に考え出したのは、東日本大 震災のときの募金の際、コンビニで受け付けるには法 人でないと認められないとされたときである。

法人といっても株式会社、公益社団(財団)法人、 NPO法人、一般社団(財団)法人、などいろいろある。しかし法人化するにあたりクリアしなければならない条件が3つあった。1は議決権の問題、2は税金の問題、3は基金の問題である。

1については、法人化するにあたって最大の問題であった。すべての法人の最終の意思決定機関は、すべての会員による総会であるが、株式会社などのように出資額(株式数)に対応して議決権が与えられている場合は、その過半数を持っている人の出席で総会は成立する場合が多い。しかしその他の法人では会員の過半数の出席が成立要件となっている。もちろん一部の法人では会員個人にかえて代議員を選出するようになっている場合もある。しかし一般社団法人法にはそのような規定はない。

花葉会の会員数は数百名以上おり、委任状をあつめても過半数の出席は不可能なことはあきらかであった。 そこで他の団体の現状などを調べ、実情にあった法人 化を考えた。

その結果、旧花葉会の幹事を幹部会員と名をかえて 法律上の社員になっていただき、その過半数(委任状 出席を含む)の出席で総会が成立することにした。

もちろん実際の総会は今までと同じように開けばよいので、ただそこに幹部会員が過半数(委任状出席を含む)出席されていればよいことになる。当然そこでは、予算、決算の承認、役員の承認などを審議することになる。

2の課税上の問題だが、これまで花葉会は税務署に対し、税法上の「人格なき社団」として届けており、セミナーなどの営利事業の申告納税、講師の謝礼の源泉課税などは実施してきた。だが一般社団法人となると原則としてすべての収入が課税対象となり、花葉会では特別会費や会報の広告収入まで課税収入とされるおそれがあり、慎重に調べた。その結果一般社団法人であっても、いくつかの条件が認められれば「非営利型法人」として公益法人と取り扱われることがわかった。

その条件とは利益があったとき会員、役員に分配を しないこと(法人に留保しておくこと)及び解散のと き残った預金等財産を国や地方公共団体、国立大学な どの公的機関に寄付すること、役員などに高額な報酬 を支払わない、などの条件を定款に記載すればよいと のことであった。

これで税金の問題は解決した。

3は基金のことである。法人化の目的の一つは基金を組み入れることであるが、この処理を誤ると基金全額に課税されることも考えられるが、これについては返還規定を定款にいれることで回避できた。この場合返還先は一般会員となる、但し返還のときは会の解散のときであり、その間の利息はつけないことを記載した。

また基金を毎年取り崩して一般会計に組み入れる件については、総会の決議が必要であることを運営規則に明記した。

以上のように法人化されたわけであるが、いままでのべてきたように、一般社団法人といっても定款の条項は公益社団法人に近いものになっている。これは将来必要があれば、所轄官庁の認可をうけて公益法人となることも視野にいれているのである。公益法人化すればメリットもあるしリスクもある。いずれにせよ花葉会が一般社団法人という道具を最大限に使って、今後ますます発展されることを期待している。

#### 編 集後 記

#### ◆お詫びと訂正

小泉力氏の記事におきまして誤りがあ りました。

正しくは以下の通りです。

目次および12-15頁

- (誤) 林脩巳
- (正) 林脩己

読者の皆さまならびに関係各位にご迷 ◆「花葉」は花葉会ホームページ 惑をお掛けしましたことをお詫びする ! http://kavokai.net/ から読むことが とともに、ここに訂正させて頂きます。できます。

◆今号では今まで総会会場での閲覧の みだった総会出欠ハガキの近況欄をよ り多くの方の目に触れるよう掲載する 運びといたしました。いかがでしたで しょうか。

## 花 葉 2015 No. 34 平成 27 年 12 月 10 日発行

発行人 三吉一光 編集人 西原彩子 発行所 花 葉 会

〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内 http://kayokai.net/ レイアウト・印刷 八千代印刷工業有限会社